

土佐国分寺

鐘楼建立・書院改築に伴う発掘調査

岡 本 健 児

広 田 典 夫

宅 間 一 之



高知県南国市国分 国分寺刊

昭和 53 年 2 月 8 日

ご あ い さ つ

国分寺では、此の度来る昭和59年3月21日宗祖弘法大師1150年御遠忌を迎えるに当り、記念事業の一環として腐朽著しい書院の改築と鐘樓堂の新築を行うべく準備をすすめて参りました処、檀信徒各位の御協力によりお蔭様を持ちまして昭和53年2月8日ここにめでたく落慶式を迎える運びとなりました。

これ等の建設工事に当り国分寺境内地は史跡指定の関係上、埋蔵文化財保護法の定めにより国分寺創建当時の一部伽藍配置が出現するのではなかろうかとの推測のもとに県教委の指導のもと南国市教委をはじめ高知女子大教授岡本健児先生、高知ろう学校教諭広田典夫先生、県教委宅間一之先生の御協力を仰ぎ発掘調査が行われました。

調査が進むにつれ、古墳時代の堅穴住居址や弥生時代の住居址貯蔵穴等が多数発見され、この地に人々が住んだのは国分寺が創建される以前七百年にも逆のぼることが明らかになりました。これ等の事情からして、一世紀弥生時代中期以後五世紀古墳時代を経て八世紀半ば国分寺が創建されるまで農耕文化を中心とした人々が住み集落をなしていたことが判明し、土佐文化発生の礎が築かれていたことが考えられます。

また創建当時の完全なる鎧瓦の出土や皇朝十二銭の一つである富寿神宝の出土、平安時代後半に火災にあったであろうということ等今までに全く不明であった部分がこの度の調査で数多く解明され、多くの成果を得ることが出来ました。

今回の書院ならびに鐘樓堂の落成を記念して、ここに岡本・広田・宅間諸先生方の全面的な御協力によりまして調査報告書を刊行することが出来ました。

各先生方に深甚なる感謝を申し上げると同時にこの度の建築に当り御協力頂きました皆様方の御厚意に対しこの報告書をもちましてお礼にかえさせて頂きたいと存じます。

本報告書が土佐国分寺の歴史を解明した考古学上の重要な参考資料として活用されるとともに歴史ゆかしい土佐国府の地がいつまでも人々の心に愛されることを念じてやまないものであります。

昭和53年2月8日

国分寺住職 林 広 裕

I 序

土佐国分寺は国の史跡として保護・保存をされている。よってなに人も勝手に現状変更を赦されないところのものである。然るに今回信者による梵鐘の寄進が起縁となって、鐘楼建立の計画となり、また古くなった書院の建替ということになった。

ここでまず土佐国分寺住職林広裕氏は、書院建替地はともかくとして鐘楼建立地については、筆者の一人岡本に相談され創建当時の伽藍配置と関係のないところを選ばれた。その後文化庁などへの許可のもとに、次のような日程やスタッフで発掘調査を実施した。

1. 鐘楼建立地の発掘 昭和52年2月4日～2月5日

2. 書院建替に伴う発掘 昭和52年5月23日～5月28日

3. 発掘責任者 土佐国分寺住職 林 広裕

4. 発掘担当者

高知県文化財審議会委員 岡 本 健 児（高知女子大学教授）

〃 広 田 典 夫（日本考古学協会員）

高知県教育委員会文化振興室埋蔵文化財担当主事 宅 間 一 之

南国市教育委員会社会教育課主幹 武 田 勝（文化財係）

南国市役所建設課建築技師 藤 田 威佳志（測量担当）

5. 発掘協力者及作業員

佐川高等学校講師 角 谷 和 男

南国市左右山 浜 田 初 美

〃 井 上 博 恵

香美郡土佐山田町小田島 時 久 元 夫

南国市岡豊町笠の川 笠の川建材店基礎部

代表者 森 義 明 他3名

南国市左右山406(旬) 井上工務店

代表者 井 上 速 男

（岡本）

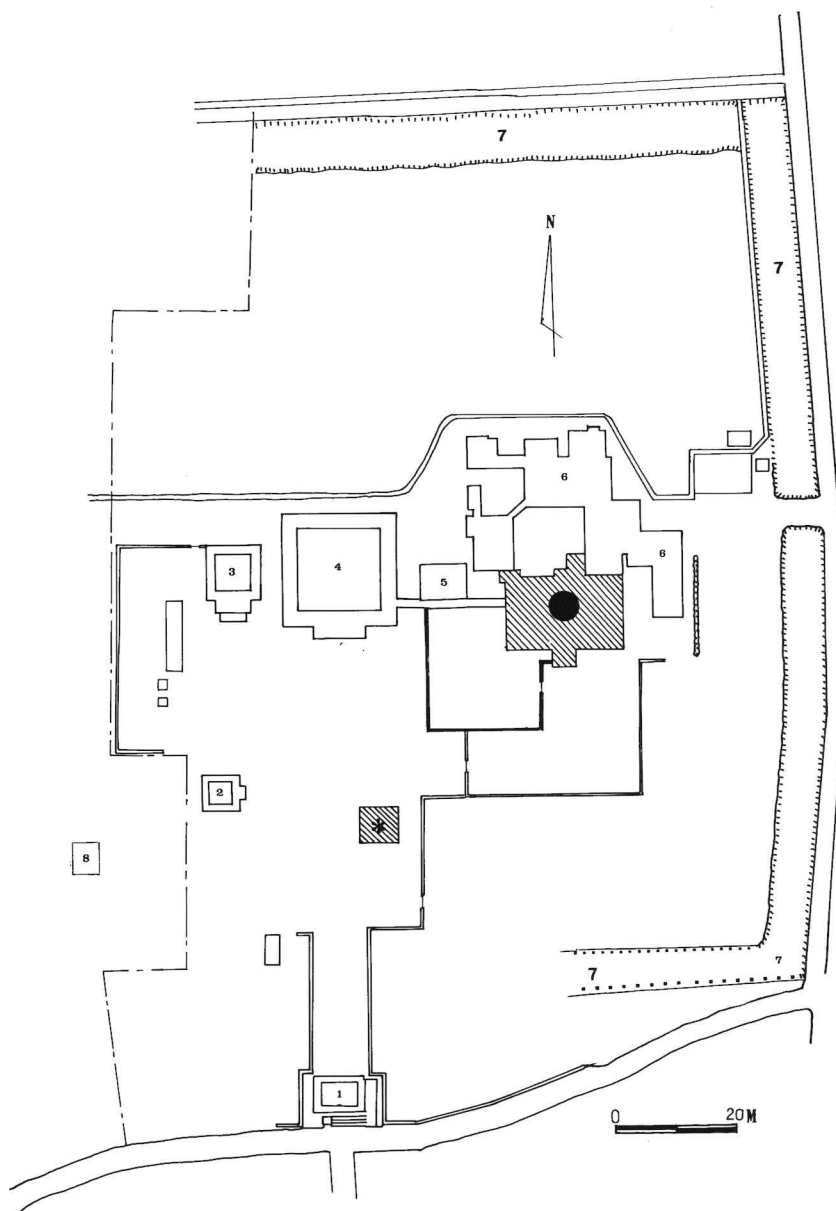


図1 土佐国分寺現在図

●書院
※新鐘楼

- ①楼門
- ②開山堂
- ③大師堂
- ④本堂（重要文化財）
- ⑤位碑堂
- ⑥庫裏
- ⑦土壇
- ⑧総社

斜線部分が発掘調査区域

II 遺跡・遺構編

図1 高知県南国市国分546番地，国分寺は大正11月12日，史蹟「土佐国分寺跡」の指定を受けている。この史蹟内に慶安3年建立の棟札をもつ客殿がある。この客殿がすでに老朽化し解体修理の止むなきにいたった。

国分寺寺域内からは，すでに各所から多くの古瓦や須恵器片が発見されており，特に客殿改築予定地は，地下遺構の存在が予測されるところであり，事前の発掘調査が必要であった。

写真 1



写真 1 客殿解体後の礎石の配置である。これらの礎石はすべてが慶安年間建立の客殿のものであり、創建、再建時の国分寺伽藍の礎石とはすべてが無関係なものであった。。

写真 2



写真 2 5月23日、小型ダンプ・小型ユンボを導入して客殿改築予定地の発掘はおこなわれた。発掘予定地400平方メートルはしだいに掘りさげられ、土佐国分寺に関するいくつかの疑問が解明されていった。



写真 3

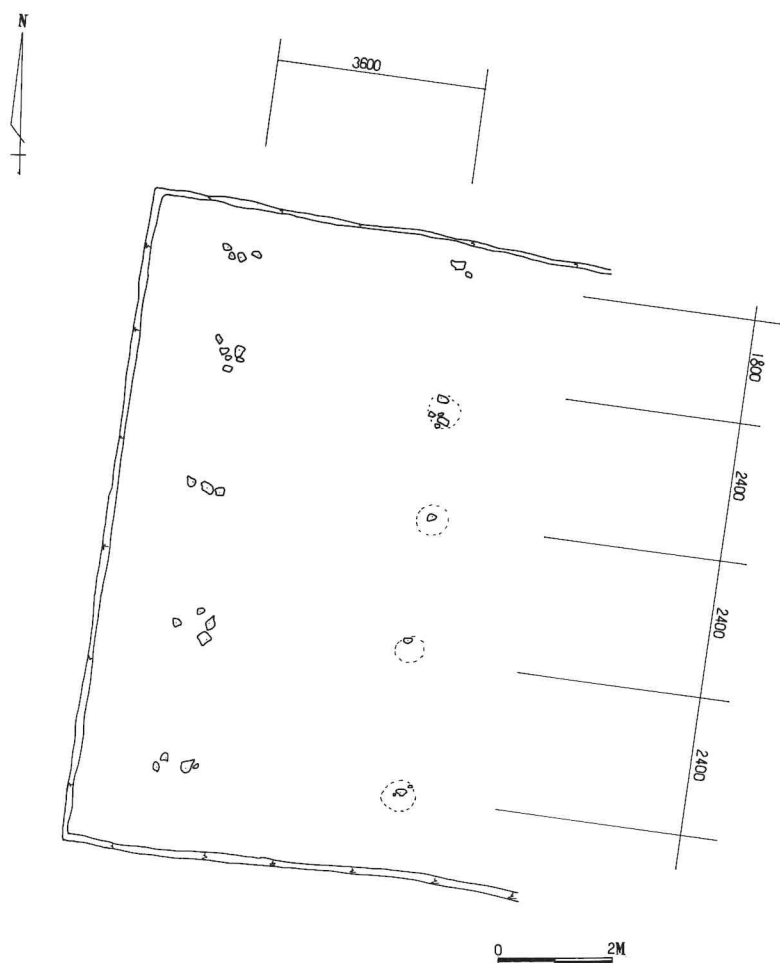


写真 3・図 2 表土を10センチほど掘りさげると、奥行き4間の建造物を確認した。しかし、間口が2間までしか根石が存在せず不明の建造物の根石とせざるをえなかった。この場合すべての礎石は亡失しており、礎石下の根石のみがわずかに残存していた。

図 2 室町時代建造物根石群



写真 4

写真 4 この根石をとりまいて，土師質土器，古備前，瀬戸天目，青磁などの破片および
洪武通宝などが出土した。これらの遺物はすべてが焼け，かつまたこれら遺物包含層には
多くの木炭片をふくみ，この建造物が火災にあったことを示していた。なおこの建造物は
出土遺物から推定して，その焼失の年代を室町時代末として誤りないものと思われる。

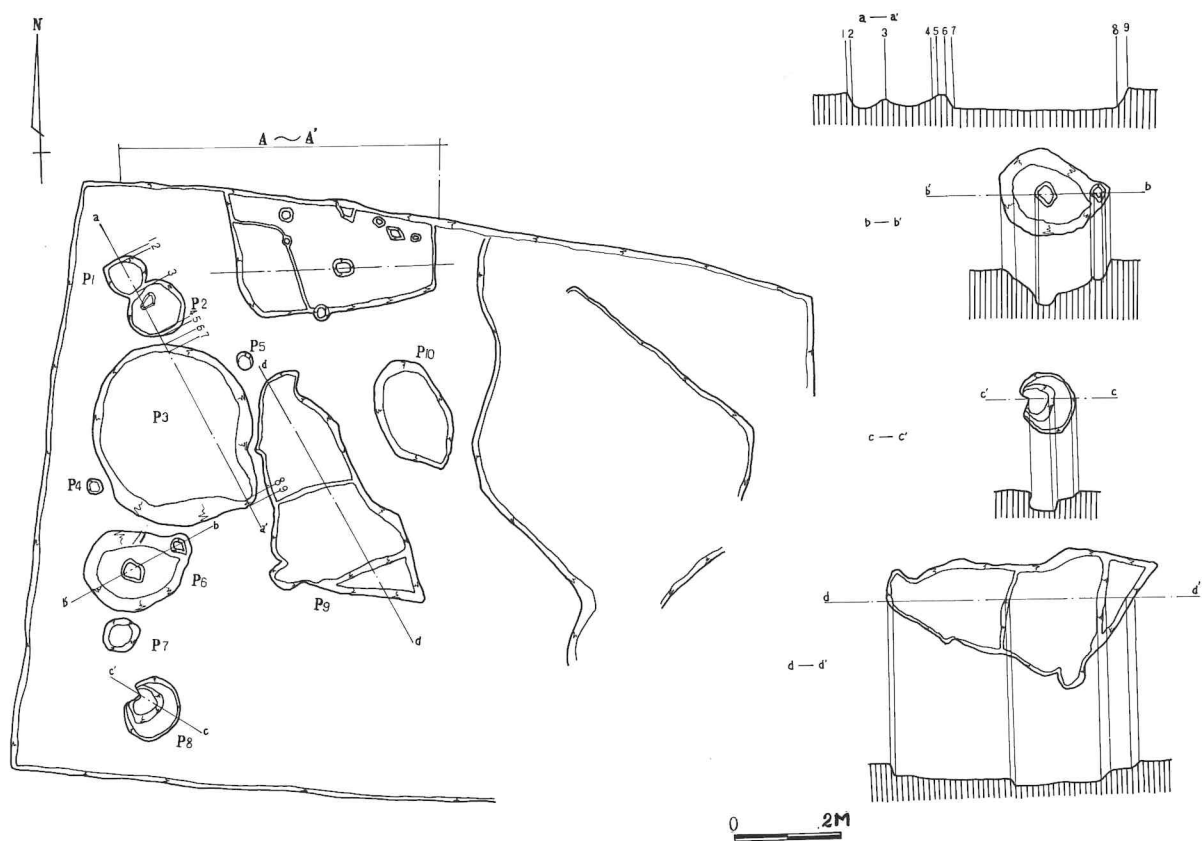


図3 瓦溜 (P3～P10)・竪穴住穴 (北部方形のもの) および貯蔵穴 (P1～P2)

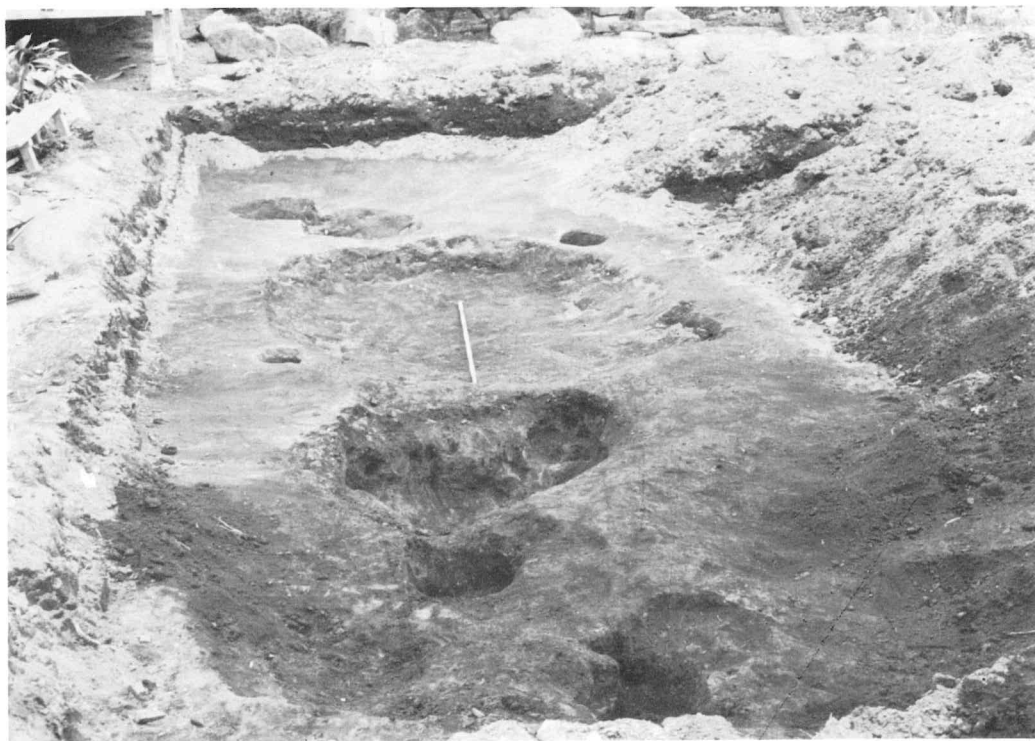


写真5



写真 6



写真 7

図 3 ・ 写真 5 ・ 写真 6 ・ 写真 7 この層から30センチ掘りさげたところに5つの瓦溜を発掘することができた。この瓦溜は、深さ30センチ程度掘りさげ、その中に創建当初の古瓦や遺物を投げこんだものと思われる。

これらの瓦溜から出土したものはその大半が焼けたものであり、また瓦溜にも数多くの木炭片がみられたところから、これらの瓦溜は創建当初の建造物が焼失し、その残骸を整理するためにつくられたものであることを物語る。



写真 8



写真10



写真 9

写真 8 西端の瓦溜り，表土層より81.7センチのところから創建当初の八弁蓮華文の鑑瓦を発掘した。完形鑑瓦と，丸・平瓦片の出土状況である。国分寺使用の鑑瓦は，これまで4種類が確認されているが，この種のものは初めての発掘である。

写真 9 同じ瓦溜からの富寿神宝の出土状況である。富寿神宝10枚を1束にし，杉の木の串状のものにつきさした状態のままで出土した。杉の木の串状のものは腐らず存していた。

富寿神宝は県内で1枚出土しているが10枚重ねての出土は最初である。

写真10 瓦溜と同一層の北部の一部から，5世紀頃の竪穴式住居が1基と，それに伴う貯蔵穴2基が発掘された。この竪穴式住居および貯蔵穴からは，馬場末式土器片（土師器第Ⅱ式）が数片出土し，柱穴，炉跡も確認できた。

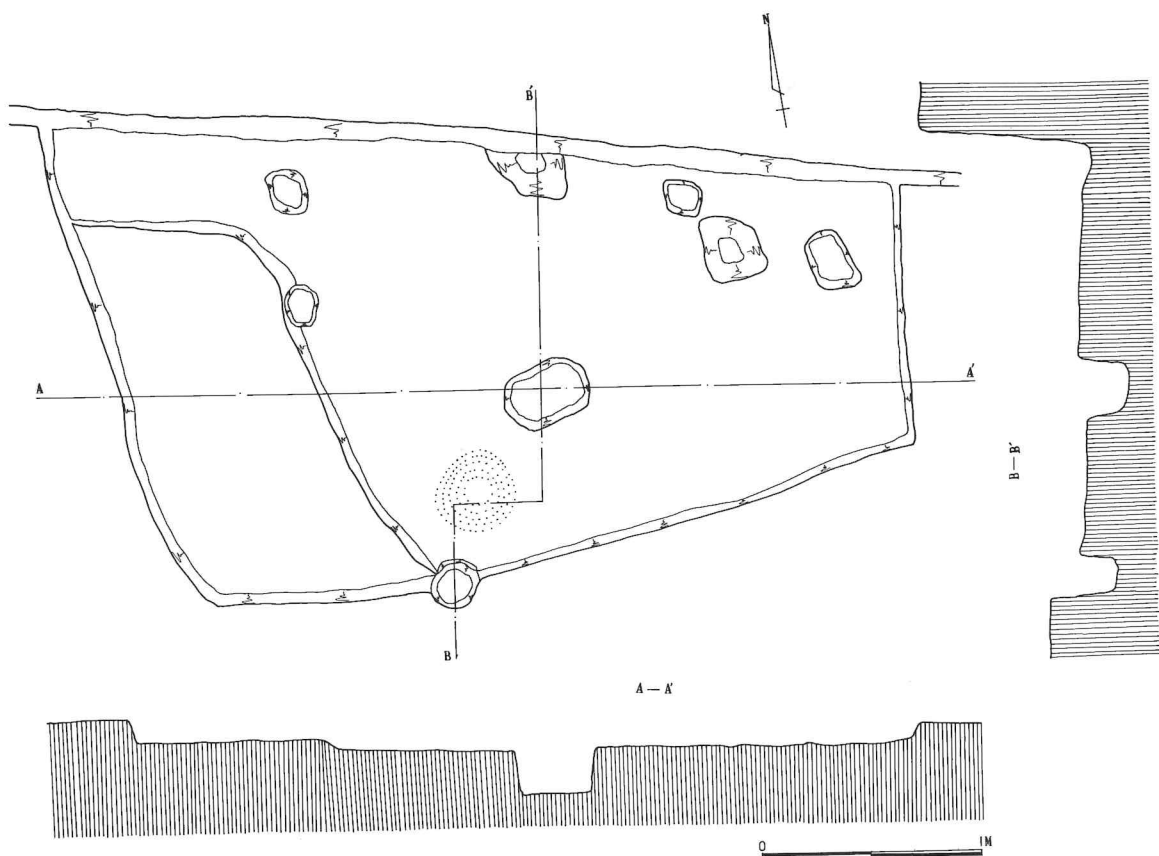


図4 竪穴住居址実測図

図4 住居址の平面・断面の実測図である。全住居址の2分の1程度である。残部は中庭となり発掘予定地外の部分である。

タテ約4メートル，ヨコ2メートルのほぼ長方形となっている。南中央部に木炭片と黒土がほぼ円形でかたまり，炉跡を示している。

当時代の住居址は県下では最初のものであり，ヒビノキ遺跡の住居址（3～4世紀）と比し，その変遷を知る上で貴重なものである。

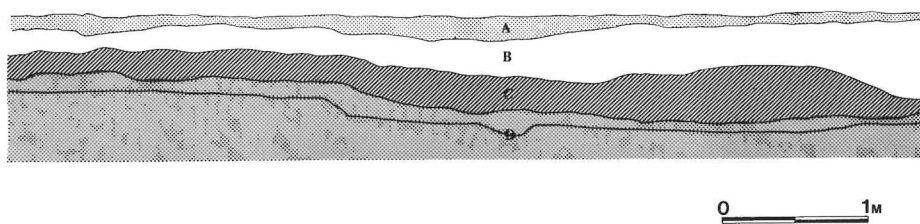


図5 住居ピット断面図

- A. 表土
- B. 砂黒土層
- C. 黒色粘土層
- D. 遺物包含層

図5 住居址，貯蔵穴出土地の層位断面図である。最上層①は表土層，②は砂質黒土層，③は黒色粘土層であり，④が遺物包含層である。

なおD層内の黒線が住居址及び貯蔵穴の断面である。



写真11

写真11 位置的に最も東に発見された瓦溜である。多くの瓦片・土師器・須恵器に混って根石らしいものも発掘された。これらの出土遺物はすべて平安時代後半にこの場所にすてられたものであることを確認した。



写真12

写真12 この瓦溜の西北部より串状木片が出土した。その出土状況である。長さ6センチ、幅0.8センチで下部にいくにしたがって細くなっている。富寿神宝にさしてあった木串と比しおもしろい遺物である。

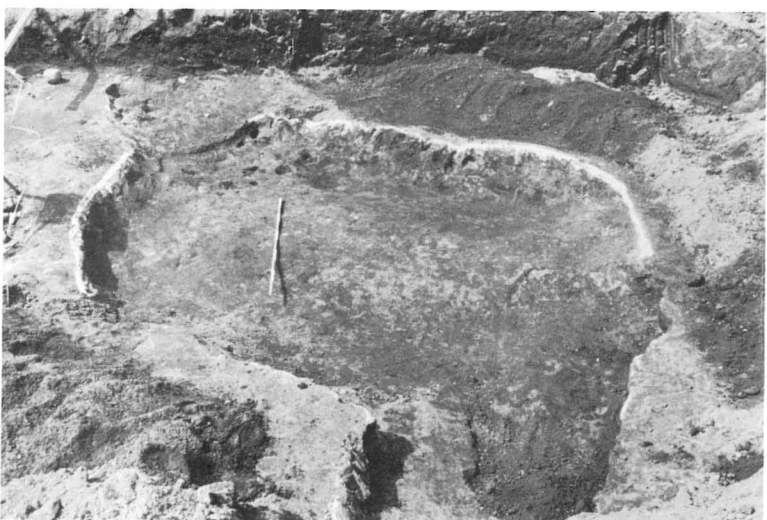


写真13

写真13 この瓦溜を掘りすすむうちに弥生時代後期の住居址を発見することができた。しかしこの住居址は壁面の一部の残存であった。(白線の部分) これはもとあった住居址が、平安時代後半に瓦溜を掘りさげるときに崩されたものであろう。

なお弥生時代後期の住居址より出土した数点の土器片は、ヒビノキⅠ式土器(弥生後期中葉)、ヒビノキⅡ式土器(弥生後期末)の破片であった。

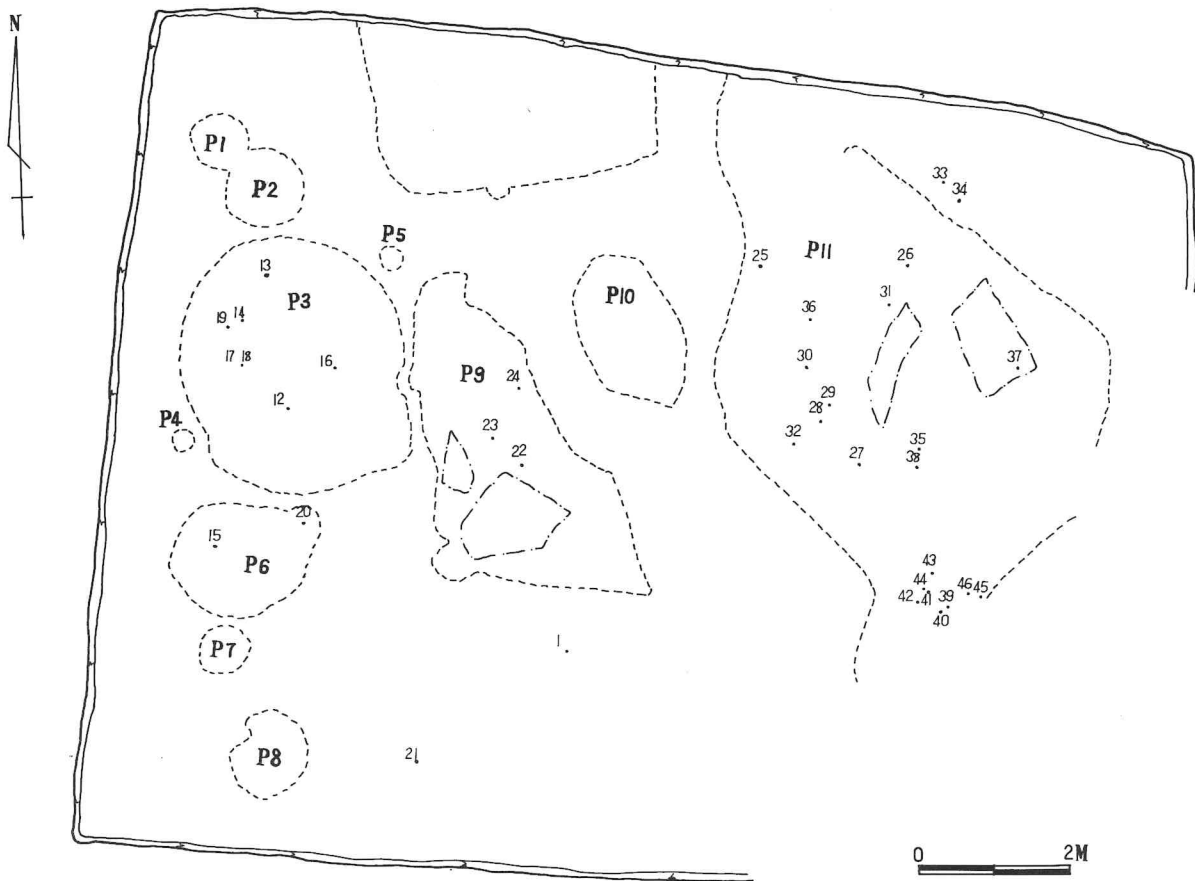


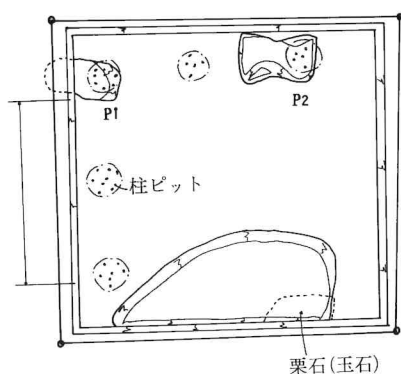
図 6

図 6 発掘地からの主な出土品の位置図である。番号がその位置を示す。

1 瓦	深さ	0.0センチ	23須恵器 (杯)	87.6	35丸瓦 (2個)	92.5
12須恵器		14.5	24古瓦群 (20片)	78.8	36鑑 瓦	92.8
13須恵器 (平安後期)		64.6	25木 片	76.5	37須恵器 (蓋)	75.8
14古備前		74.7	26鉄	81.0	38ヒビノキⅡ式土器底部	98.8
15土師器 (平安時代)		70.0	27平瓦 (刷毛目のあるもの)		39ヒビノキⅡ式土器片	123.2
16高台付土師器杯		86.7	28平瓦 (刷毛目のあるもの)	77.2	40ヒビノキⅠ式土器片	119.2
17鑑 瓦	}	81.7	29平瓦 (格子目のあるもの)		41ヒビノキⅡ式土器片	107.8
18鑑 瓦			30平 瓦		42ヒビノキⅡ式土器片	104.4
19富寿神宝		89.8	31平 瓦		43ヒビノキⅡ式土器片	114.6
20鑑瓦 (小片)		66.5	32土師器 (杯)	88.1	44ヒビノキⅠ式土器片	107.8
21鑑瓦 (蓮華文)		66.5	33平瓦 (格子目のあるもの)	83.1	45ヒビノキⅠ式土器片	128.1
22土師器 (杯)		89.2	34瓦 片	83.1	46ヒビノキⅠ式土器片	128.1

(宅間)

参 道



土 塀

0 2M

図 7 鐘楼建立地における発掘

図 7 以上の遺跡・遺構は書院建替に伴う緊急発掘で見られたものである。図 7～図 9 は鐘楼建立に伴って発掘された関係遺構である。鐘楼建立によって掘り下げられる範囲を発掘したところ、地表下10cmで柱を建てた浅いピット状のものが発見された。その浅い柱穴には小さな小石があり、根石的役割をしている。またそれらの柱穴群はほぼ1間間隔にあった。図にみる如く 6 個の柱穴しか発見されなかった。周辺から出土する遺物から推して藩政期でも初頭のものと考えられる。図 7 に示すピット 1・ピット 2 (P 1・P 2) は次に述べるように弥生時代の貯蔵穴である。

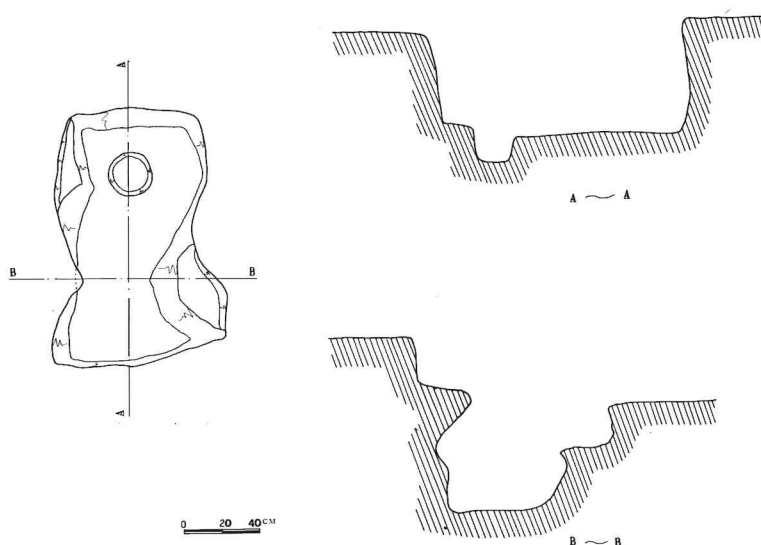


図8 貯蔵穴の1

図8 2個の弥生時代の貯蔵穴が発見されたが、そのなかの1つである。やや袋状をなし途中に段状部がある。中央のやや一方寄りに柱穴があり、これによってこの貯蔵穴は覆いを持っていたことになる。柱穴の径23cm、貯蔵穴の大きさ縦1.35m×横0.9m（最大幅）、深さ60cmである。この貯蔵穴から城式土器片（弥生中期後半一畿内第Ⅲ様式新併行）が出土していて、この貯蔵穴の年代を示している。

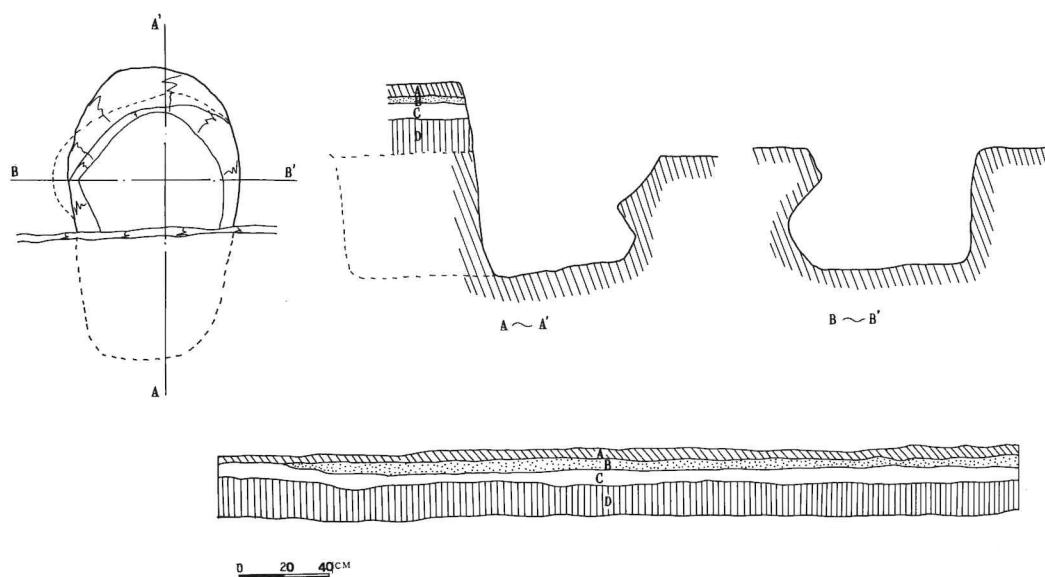


図9 貯蔵穴の2 実測図と層位断面図

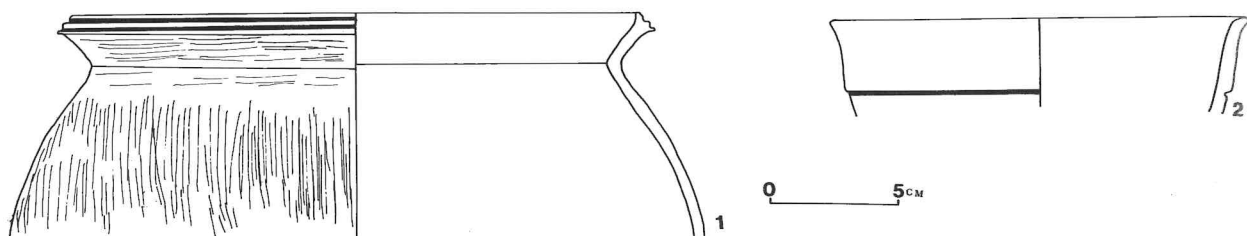
図9 貯蔵穴の2である。発掘区の関係で半分しか発掘できなかった。推定の長軸1.28m×短軸75cm（最大幅）、深さ50cmである。やや袋状をなす。

この鐘楼建立地の地層層位として、表土層（A層）は黒土層である。第二層（B層）は砂利混りの粘土層である。第三層（C層）は黒土層でこのなかに焼けた国分寺の古瓦を多く含む。藩政期の柱穴とみられるものは第二層にみられた。第四層（D層）は砂礫混りの粘土層でこのなかに2つの弥生時代の貯蔵穴が掘り込まれている。この貯蔵穴からは遺物は発見されなかったが、1の貯蔵穴と同時期とみてよからう。（岡本）

III 遺 物 編

中期弥生土器 (第1図)

鐘桜堂建立に伴う緊急発掘調査で、2基の弥生中期中葉の貯蔵穴が発見されたことは先述した。この2基の貯蔵穴のうち、北側の貯蔵穴より17片の弥生土器片が出土した。そのうち図示可能な土器を示したが、1は甕形土器で、口縁は跳上り口縁でまた2本の凹線文がある。褐色で下部の破片は煤けている。細かい刷毛目が上胴部に縦走し、頸部にはヨコナデの痕がある。2は壺形土器で長頸壺の口縁とみられる。口縁および口縁端はやや厚く作られ、複合口縁風である。複合口縁風の下部には凹線文が1本入れられる。器形などから当地方の弥生中期中葉の城式土器（畿内第Ⅲ様式―新―に併行）である。よって鐘桜堂建立で発見された2基の貯蔵穴は弥生中期中葉のものと考えてよからう。



第1図 中期弥生土器実測図

後期弥生土器

書院建替に伴う発掘で、最も大きく位置的に最も東にあった瓦溜の最下部に後期弥生土器が散在していた。この理由については他の部で詳述するが、出土した土器類は次の如き弥生後期中葉のヒビノキⅠ式土器、後期末のヒビノキⅡ式土器である。

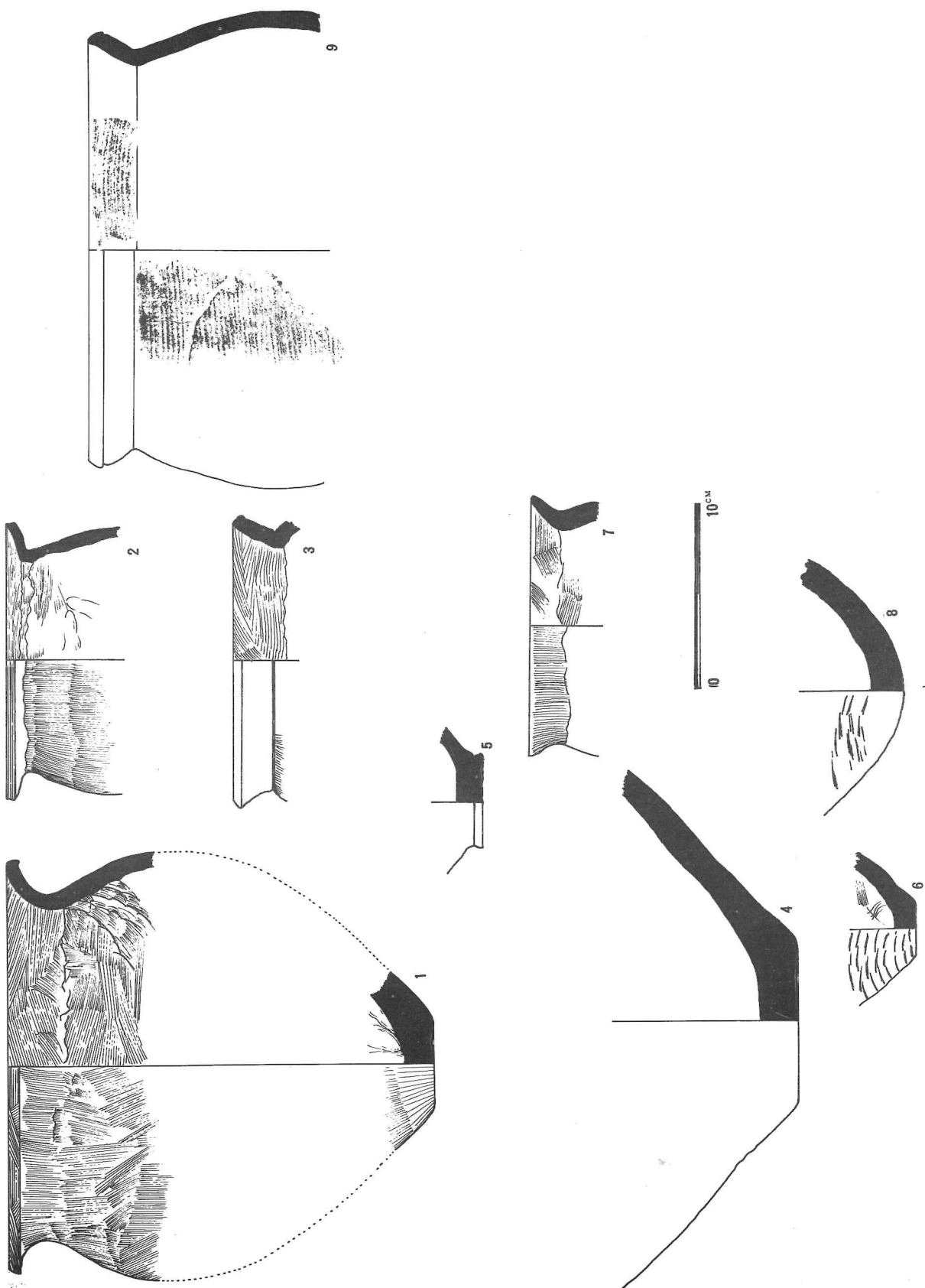
ヒビノキⅠ式土器 (第2図1～5)

第2図1と4・5は壺形土器で、1は褐色で口縁部は外反し、器面は一面に不規則に刷毛目がある。内面にも刷毛目が強く不規則につけられている。底部器面には荒い刷毛目がみられる。底部は大きく安定している。

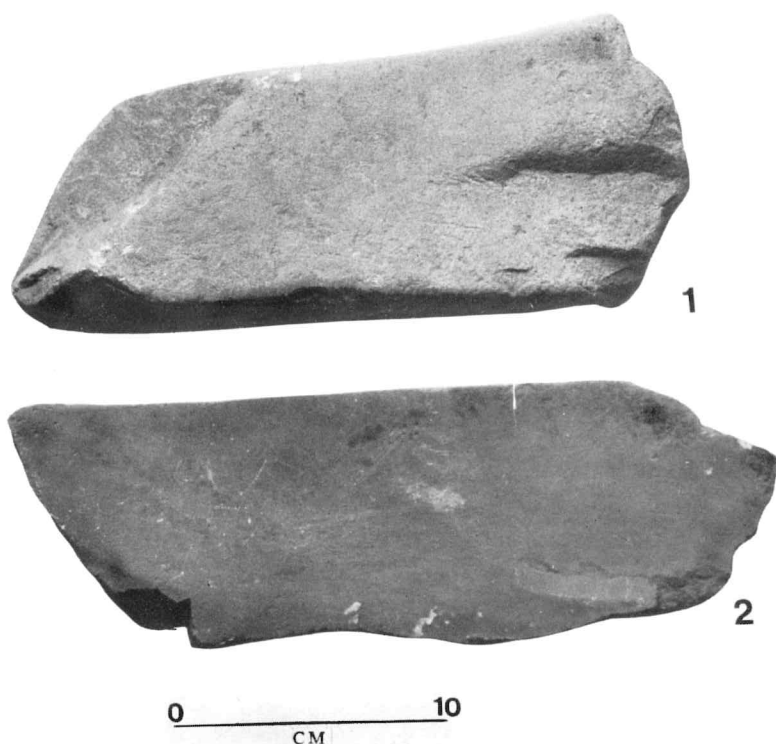
第2図2はヒビノキⅠ式土器甕形で褐色をなし一部に煤のかかったところがある。焼成は良好、器面に刷毛目がみられ、内面にも刷毛目がみられる。

ヒビノキⅡ式土器 (第2図3・6・9)

すべて甕形土器であり、口頸部と底部である。焼成は不良で、胎土には荒い砂粒を含む。褐色を呈す。胴部に荒い刷毛目が横走する。底部は平底であるが、やや小さく不安定である。底部近くにはとくに敲目痕がみられる。



第2図 後期弥生土器と土師器実測図



第3図 砥 石

砥石（第3図1・2）

大形のもので1は砂岩，2は粘板岩である。2はその砥がれた痕から長期間使用されたものとみられる。出土地点もヒビノキⅠ式土器・ヒビノキⅡ式土器の出土地に近いところから両式土器に伴う砥石とみてよからう。石器・鉄器を砥いだものであろう。

土師器（第2図7・8）

書院建替に伴って，古墳時代中期とみられる竪穴住居1とそれに伴う貯蔵穴2が発見された。それらの遺構から

敲目の発達した土師器片が10片近く出土している。それらは本地方で馬場末式土器と呼称されているものである。

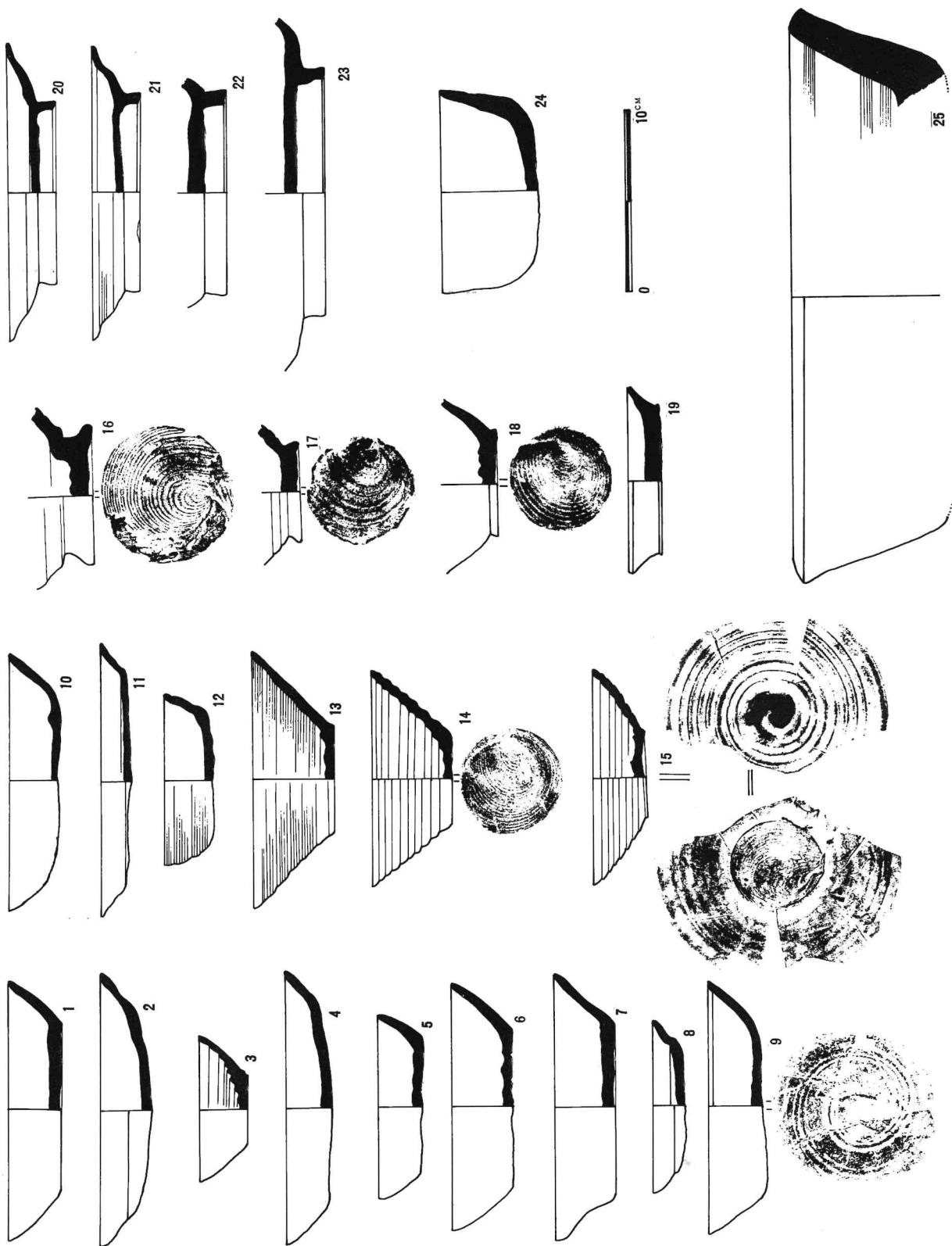
馬場末式土器

実測し得たものは竪穴住居跡より出土した甕形の口頸部と底部のみである。口頸部に刷毛目がみられるが，胴部と底部には敲目痕がみられる。尖底にちかい丸底の底部である。

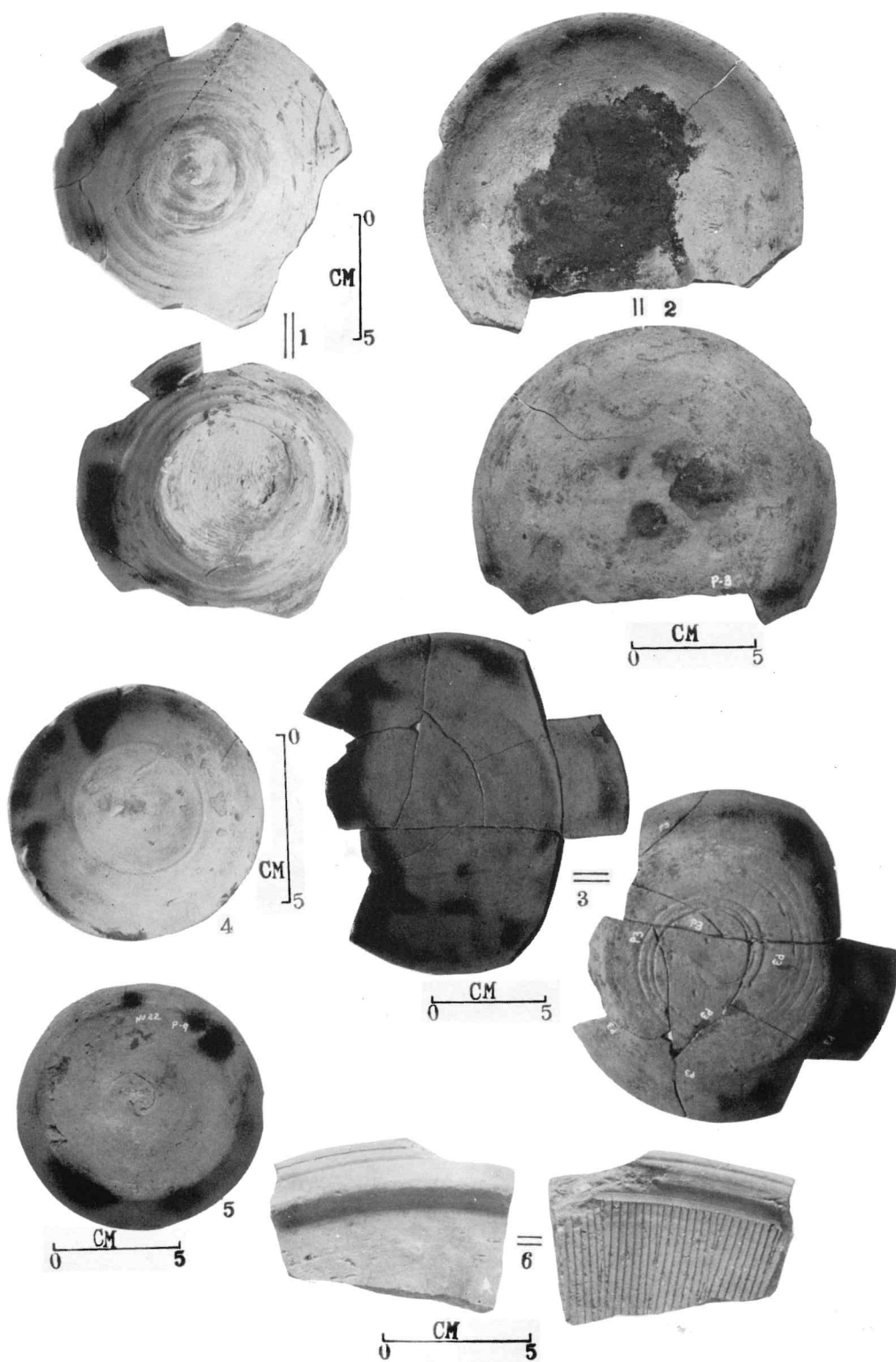
歴史時代土師器（第4図1～2・4～11・19～25・第5図2～5）

5つの瓦溜のうち，とくに多量の土師器類の出土したのは，ピット3と命名したものである。第4図の1～2・4～11や19～23の盤・杯・台付盤などは，このピット3より出土している。灯明皿として使用したものもあり，内面や口縁が黒く煤けており，また仏への供献具としての使用も考えられる。

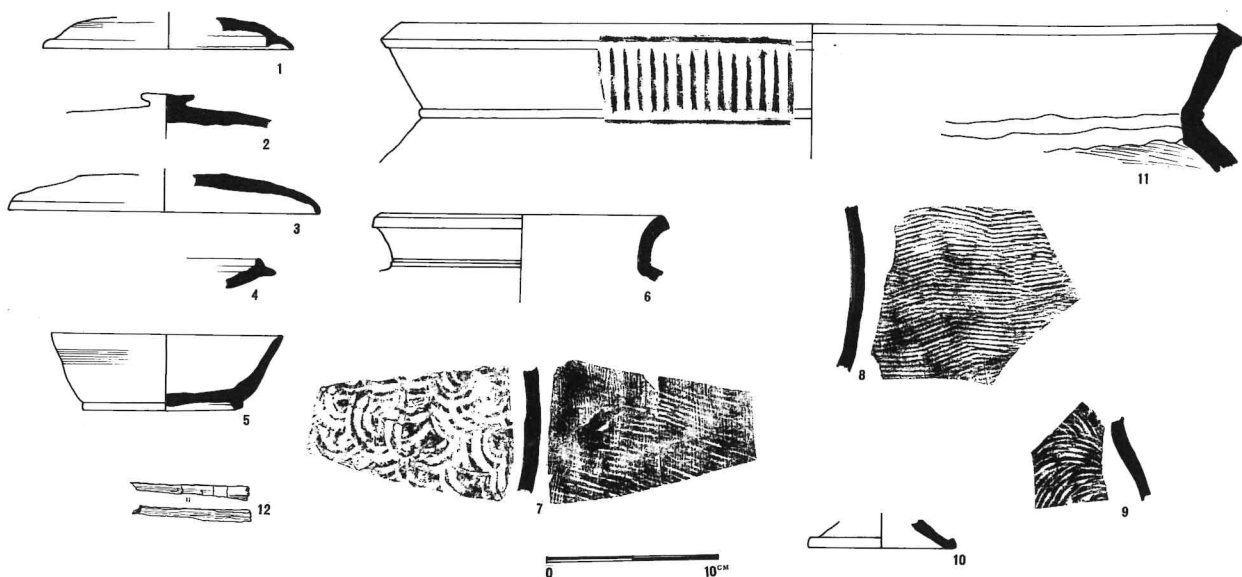
第4図1～2・4～11は灯明皿として使用されたもので，内面に煤の痕が残っている。口径・底部とも大きさはさまざまである。口径が15cmのものが大形で，口径9cm前後のものもある。20～23は杯ですべて高台をもつものである。



第4図 歴史時代土師器と土師質土器



第 5 図 土師器（歴史時代）と土師質土器・備前摺鉢



第6図 須恵器・串状木片実測図

高台は貼り付高台である。淡い黄色をした良質の粘土を使用している。低い杯部にはロクロ目が残っている。24は碗形土器で口径11cmで底部は丸底に近い。19は口径11,2cm, 底部は平底で8,3cmである。25は鉢形土器で口径28,7cm, 赤褐色で焼成は非常によい。胎土には多量の小砂粒を含み器面には凹凸が多い。

以上の土師器類は瓦溜のなかに混入している点から考慮して, すくなくとも平安時代の土師器として誤りないと思われる。これらの土師器と異ってロクロ痕の明瞭な, そして底部に糸切のあるものは, 本地方では主として室町時代に使用されたもので, 筆者の1人岡本はこれらを土師質土器と呼んでいる。

土師質土器 (第4図8・12~18 第5図の1)

土師質土器は瓦溜の上部, 主として室町時代の遺物包含層より出土している。これも内面・口縁の煤けたものがあるところから, 灯明皿として使われたものが多かったろう。3・12~15は器面, 内面ともに水引ロクロ痕が残っているもので, 底部は糸切底である。16~18は高台のある土器で器面内面ともにロクロ痕が残っている。底部は糸切になっている。

須 恵 器

瓦溜あるいは竪穴住居址(古墳時代中期)の真上などから, 各種の須恵器が出土している。

杯 (第6図4・第7図5)

蓋受けの立ち上りが低く, 土佐の須恵器V式に編年されるものである。7世紀中葉ぐらいに位置づけてよかろう。竪穴住居址(古墳時代)の真上より出土している。

蓋（第6図1・3，第7図4・6）杯（第6図・5・第7図の3）

杯の受口のみられるものと、そうでないものがある。第6図1の蓋は杯5に伴うもので、焼成もよく灰黒色を呈するものである。蓋は上部やや平らな大形のつまみがついている。第6図5の杯は高台をもつ焼成のよいもので、口唇部がやや外反している。この蓋5の杯は瓦溜の中より出土しているが、ともに一部が火災のためと思われる煤が付着していることは注目してよい。

甕形（第6図6・9，第7図の7）

外面に敲目痕、内面に青海波文を持つ甕形須恵器である。9は外面に自然釉がたれていて、外面敲目は図示していないが7と同様の敲目痕がある。

高杯脚部（第13図の10）

裾が大きく広がるもので、このタイプの高杯は杯部もあまり大きくない。灰黒色で焼成はよい。このタイプの高杯は高知市秦泉寺廃寺跡からも出土している。奈良時代中期に編年されるものであろう。

以上述べた蓋と杯、甕形・高杯脚部は須恵器でも奈良時代中期から平安時代前期に位置づけられるもので、いわば土佐国分寺の創建当時のものである。そしてなかにはこれらの須恵器が二次的に火を受け煤けていることはすでに述べたところである。

これらの須恵器群に対し、いま一つ時代の新しい須恵器群がある。次に紹介するものはその一部であってともに瓦溜の中から出土している。

甕形（第6図の8・第7図の8）

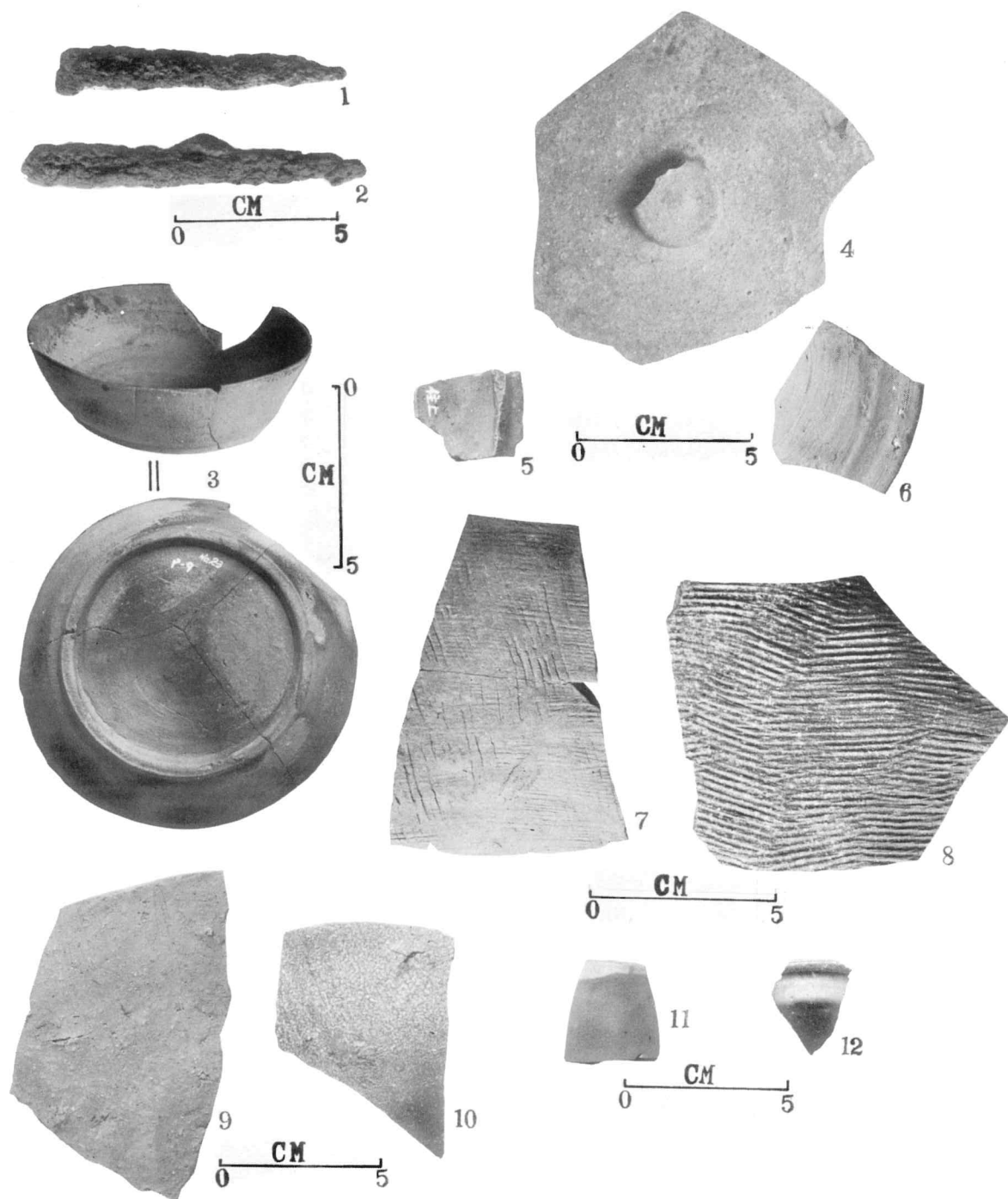
口頸部と胴部であるが、口頸部の立ち上りはすくなく、やや外反するもので、胴部には細かい敲目がみられるが、内面には青海波文はみられない。平安時代後期に編年されるものであろう。

甕（第6図の11）

瓦質の大形甕の口頸部で、口頸部に木型様の器具による断面台形をなす文様が付けられている。焼成よく硬質なものである。室町時代の土師製土器と伴出した。

串状木片（第6図13）

瓦溜の上部より出土したもので、串状をなす。残存部の長さ6.7cmである。先端部は折れているので折損してなければ長さ9cm程度のものであろう。刀子で削ったようであり、厚みは0.3cmで、いわば扁平な串といったがよからう。現段階では何に使用したか判明しない。また瓦溜上部なのでその時代も室町時代のものであると考えてよくなさそうか。材質は杉である。なお片面の平坦面には刀子の切口が平行につけられている。



第7図 鉄釘・須恵器・古備前・青磁・天目

鉄 釘 (第7図1～2)

相当腐蝕している。長さ7 cm～8 cm程度で角釘である。瓦溜めの中から瓦の破片にはさまって出土している。出土状況から平安後期以前の鉄釘とみてよからう。

古備前・青磁・天目（第7図9～12）

古備前焼壺（9・10）の破片で図示した以外にも出土している。褐色を呈す。自然釉のかかっているものもある。室町時代遺物包含層から出土している。11は青磁の破片で淡い青磁色をなす青磁で室町時代の土師質土器と伴出している。12は天目茶碗の破片で、茶褐色の斑点がみられる。胎土は荒目の白土を使用したもので、瀬戸天目とみられる。これも青磁・土師質土器と伴出している。

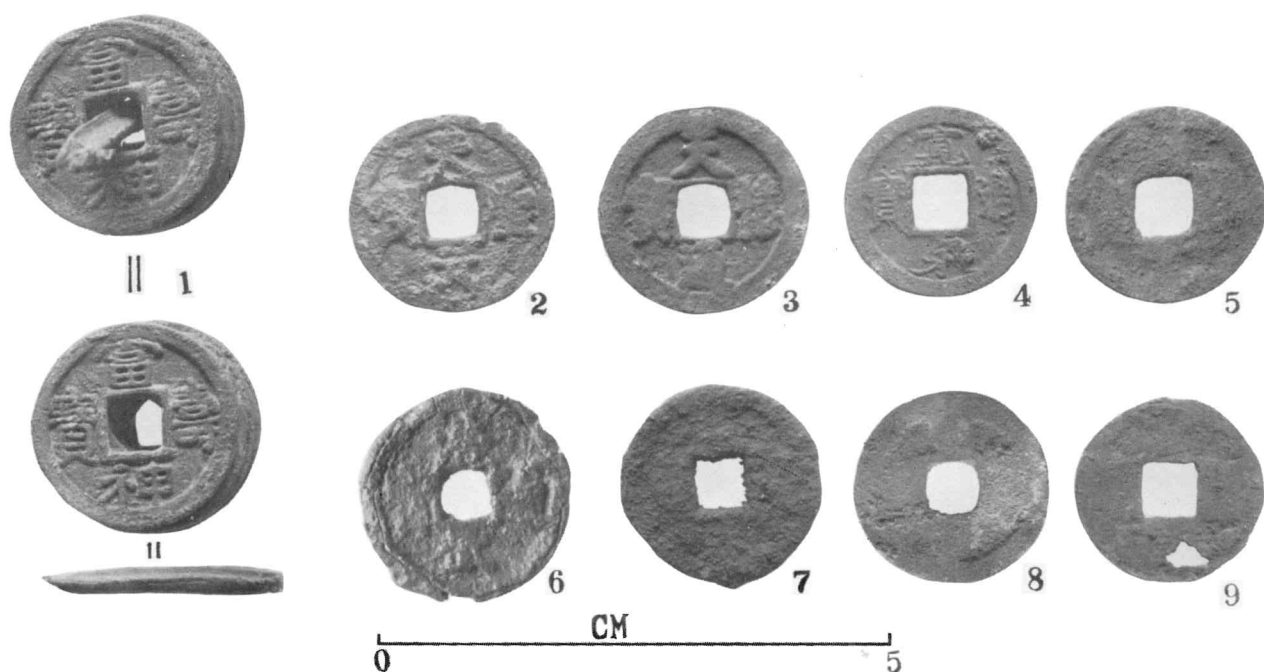
備前掬鉢（第5図の6）

室町時代の遺物包含層の上部より出土した備前掬鉢である。掬鉢の内部の目は密になっている。江戸初期のものとみられる。

銅 銭（第8図の1～9）

1の上段は皇朝十二銭の一つ富寿神宝が10枚腐着して、しかも中央の穴に三角形の串状木片がささって出土した状況を示す。最下段に図示した串状木片は長さ2.9cm、厚さ0.3mmで杉材である。富寿神宝は瓦溜の中から創建当時の古瓦類と伴出した。

室町時代の礎石根石群のあった層から出土した古銭は、北宋銭の天禧通宝（3）・天聖元宝（2）・洪武通宝（6）とそれに銭文のあきらかでない島銭（5・7～9）も出土している。寛永通宝（4）は攪乱層から出土している。

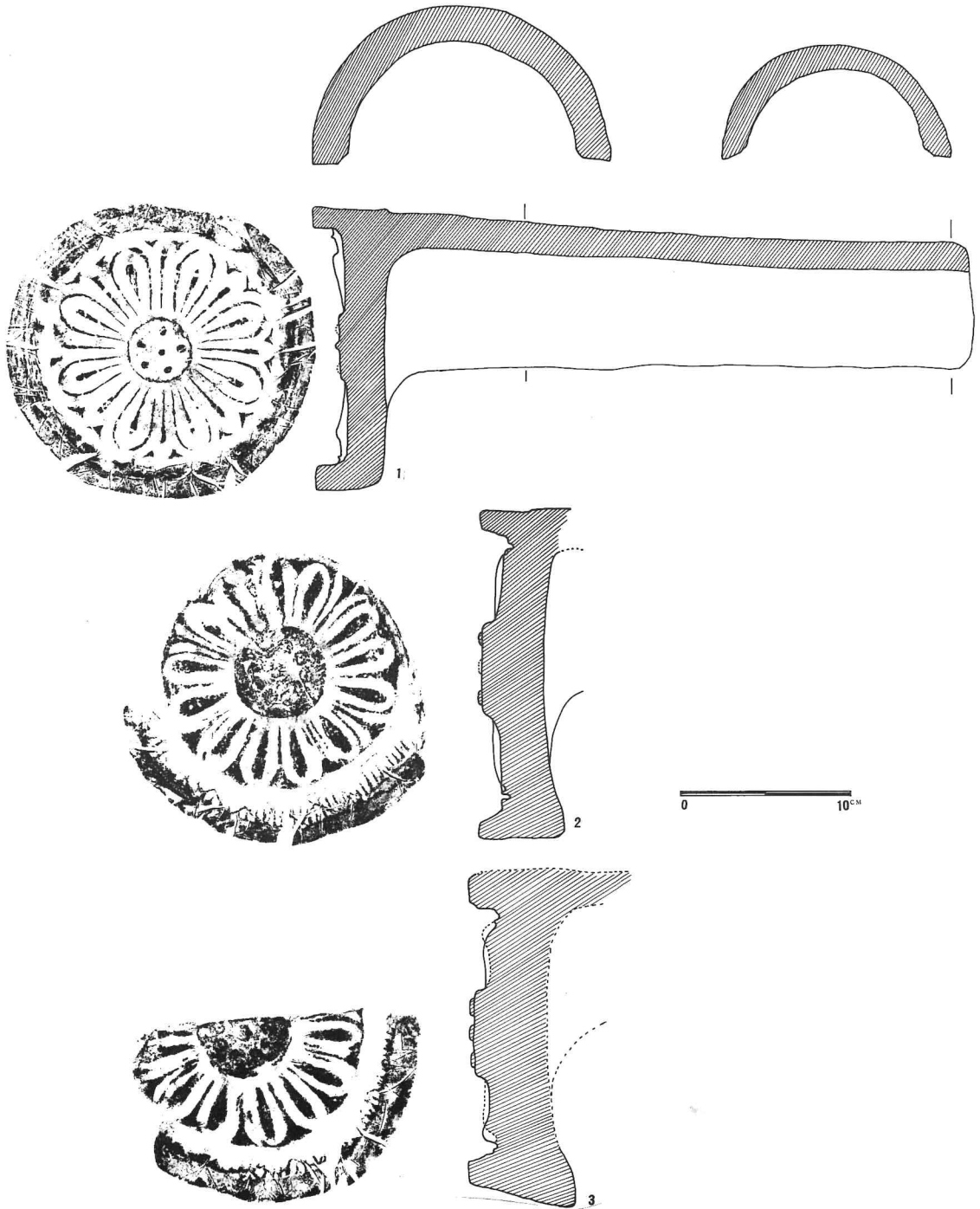


第8図 銅 銭

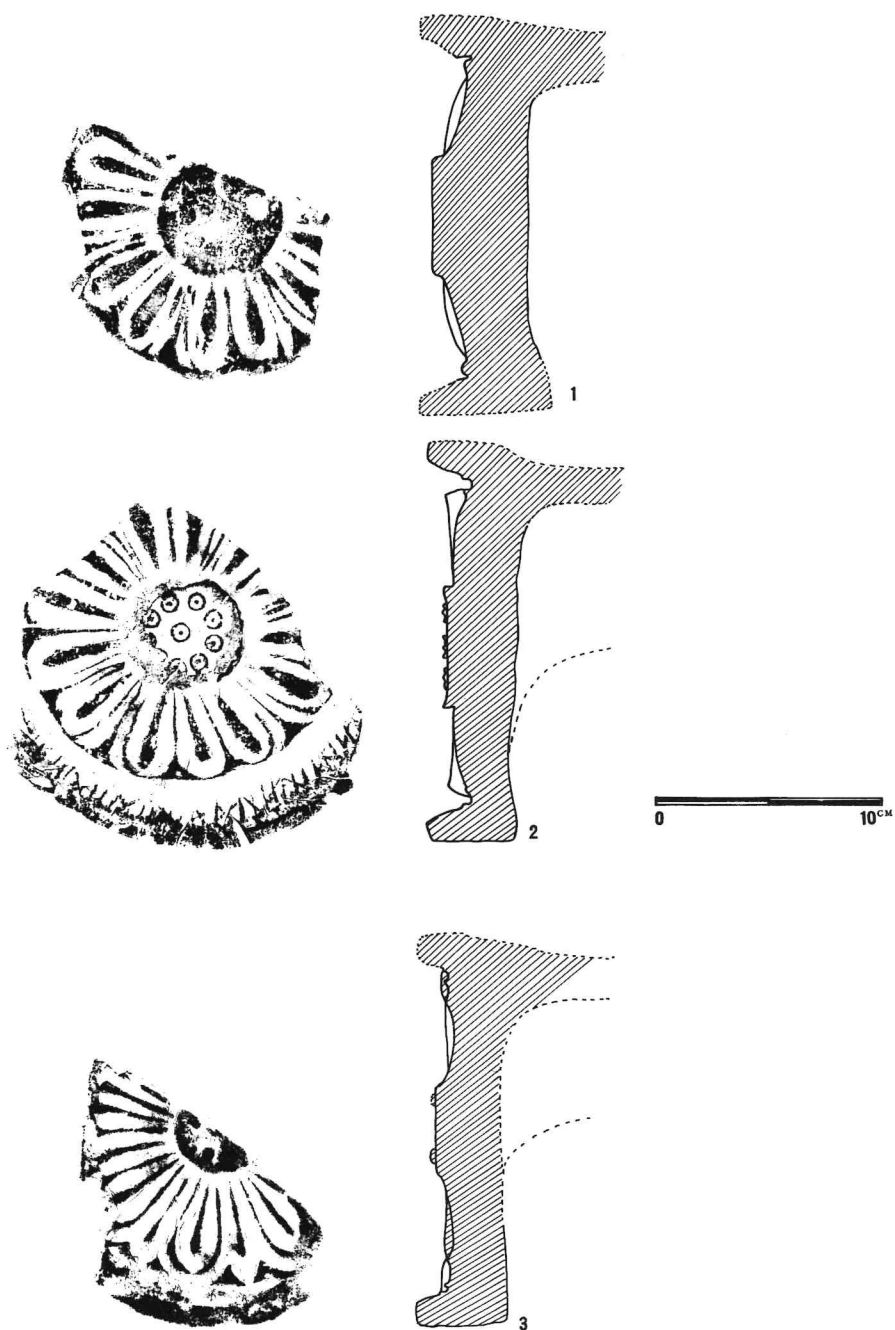
瓦 類

鑑 瓦

瓦溜から出土した鑑瓦は大別すると3種類にわけることができる。そのうち複弁蓮花文鑑瓦が1種・単弁蓮花文鑑瓦が2種となる。



第9図 蓮花文鑑瓦

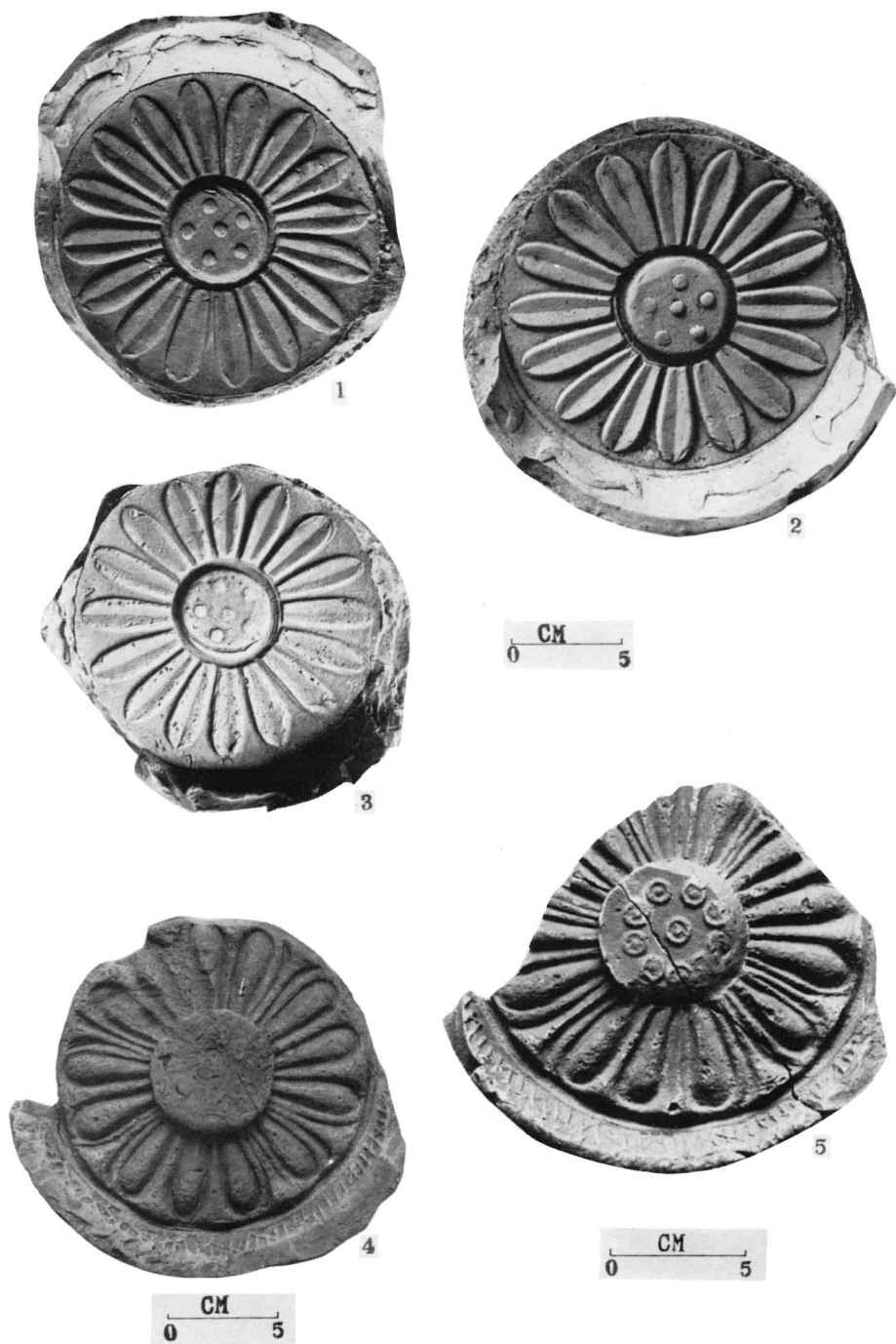


第10図 蓮花文鐙瓦

複弁蓮花文鐙瓦

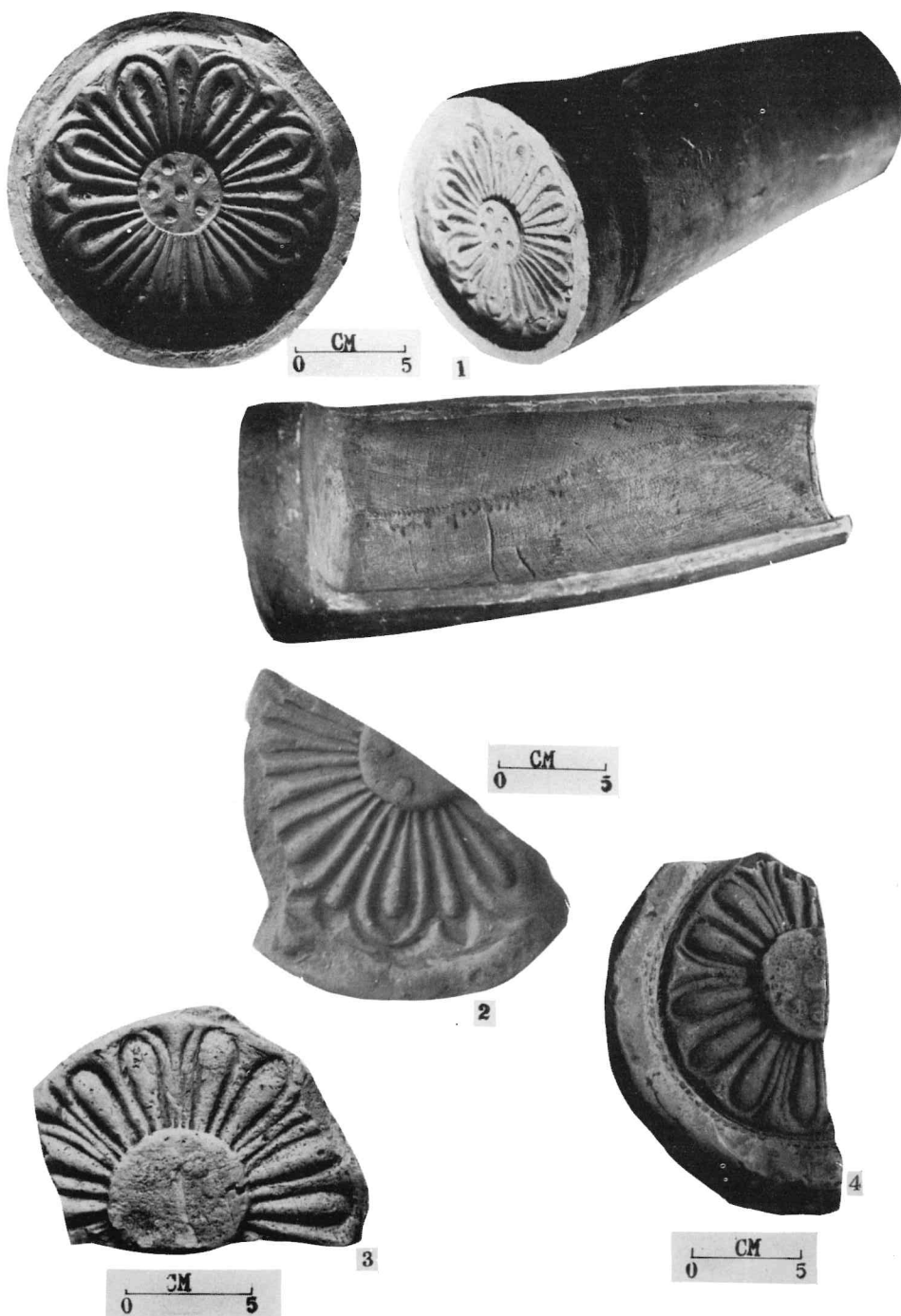
(第9図2・3, 第10図1・2, 第11図4・5, 第12図3・4)

瓦当の径19.2cm, 中房の径5.5cm, 厚さ3.7cm~4.5cm程度である。周縁の幅1.5cmの内傾縁で鋸歯文がつけられている。内区は複弁6葉で蕊の数は13ある。弁の中の蕊は同数でなく1葉1蕊, 1葉2蕊がそれぞれ3, 1葉に3蕊が2の割合でおさまっている。中房内の蓮



第11図 蓮花文鐙瓦

子は10個である。以上のものは第9図2・3，第10図1に図示したものである。これらの鐙瓦はすべて二次的に火を受けて褐色をなし，蓮子などは磨滅している。その点第10図2の鐙瓦は二次的に火を受けていないため，蓮子は二重円になったしっかりしたものであり，本来この形の鐙瓦の蓮子は二重円をなすものであることが判明した。



第12図 蓮花文鐙瓦

単弁蓮花文鐙瓦その1

(第9図の1, 第10図の3, 第12図の1・2)

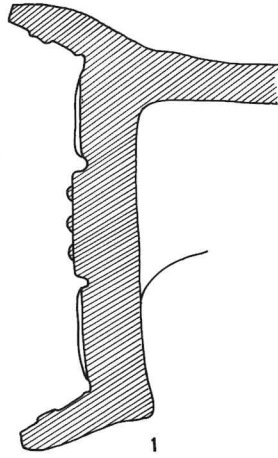
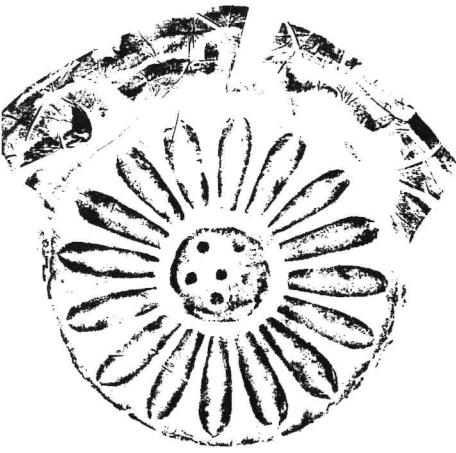
瓦当の径16.5cm, 中房の径4cm, 厚さは2.5cmで薄い。周縁の幅1.2cm, 直立縁で素文である。内区の単弁は8葉で蕊は細く表現している。素弁8葉の間弁がそれぞれの蓮弁間に配されている。中房の蓮子は6個で蓮子としては小さい。第10図3の鐙瓦は二次的に火を受けている。

単弁蓮花文鑑瓦その 2

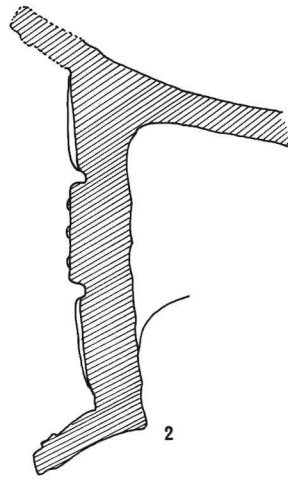
(第13図 1～3, 第11図 1～3)

瓦当の径19cm, 中房の径は4.5cm, 厚さ2.7cmである。周縁は内傾し高さ3.5cmで「疎波文」がみられ, 厚さ0.8cmである。内区の中房周辺は幅0.5cm, 深さ0.3cmの円がめぐらされている。内区は素弁16葉で, 中房の蓮子は6個で小さい。第13図の2のみ二次的に火を受けている。

第14図の1は複弁蓮花文鑑瓦の瓦当部が欠落したもの, 第14図の2は単弁蓮花文鑑瓦その2の瓦当部の一部が欠落したものの実測図である。

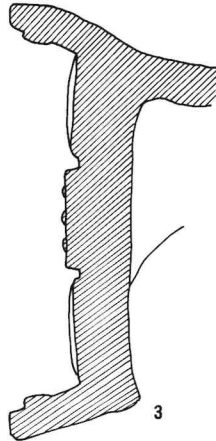
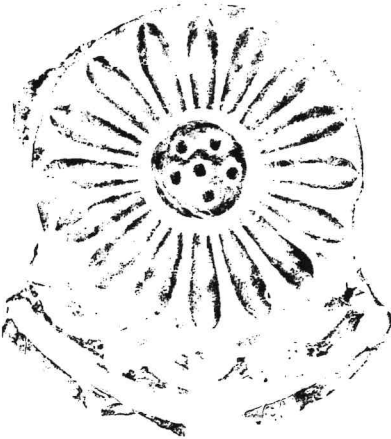


1



2

0 10cm



3

第13図 単弁蓮花文鑑瓦実測図

宇 瓦

以上の鑑瓦に伴う国分寺出土の宇瓦は三重弧文字瓦である。

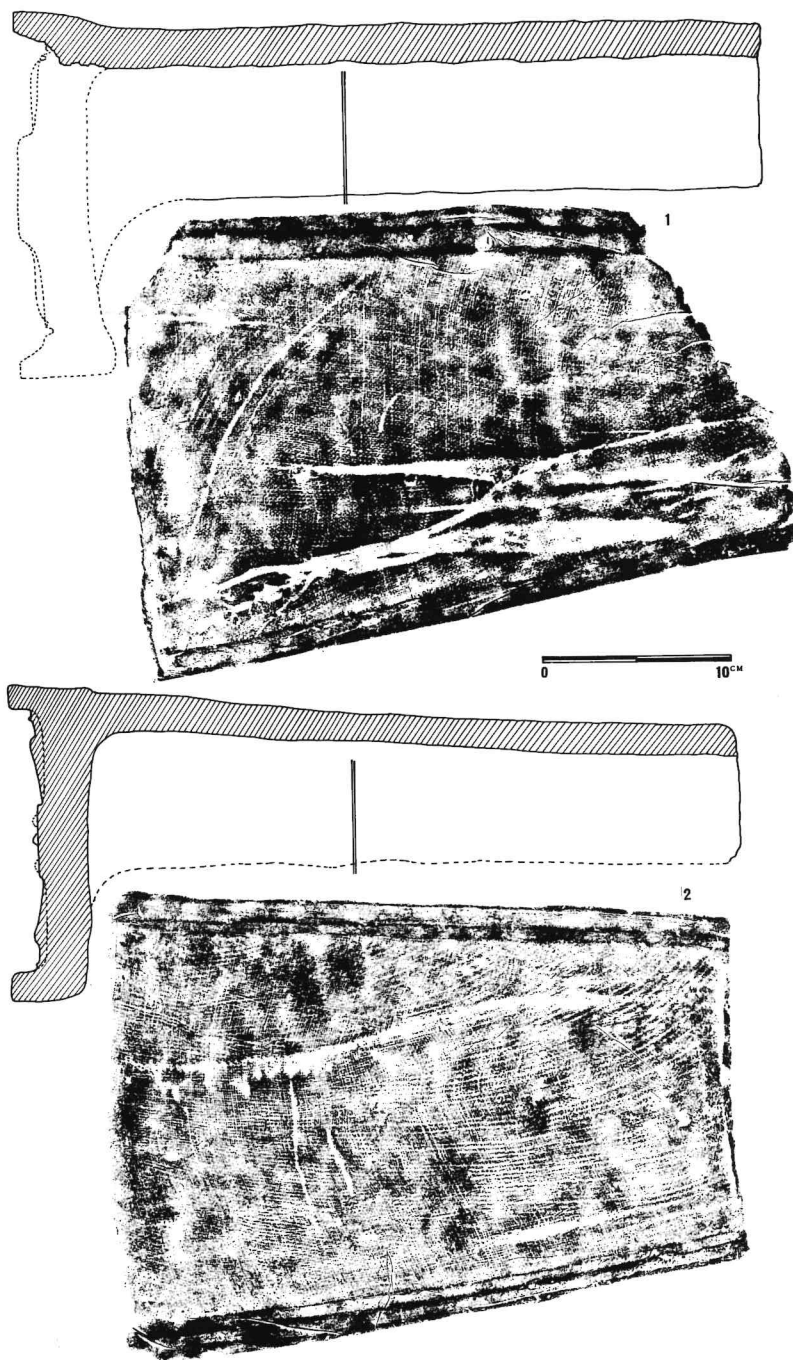
三重弧文字瓦

(第15図 1～4, 第16図 2, 第17図 2～3)

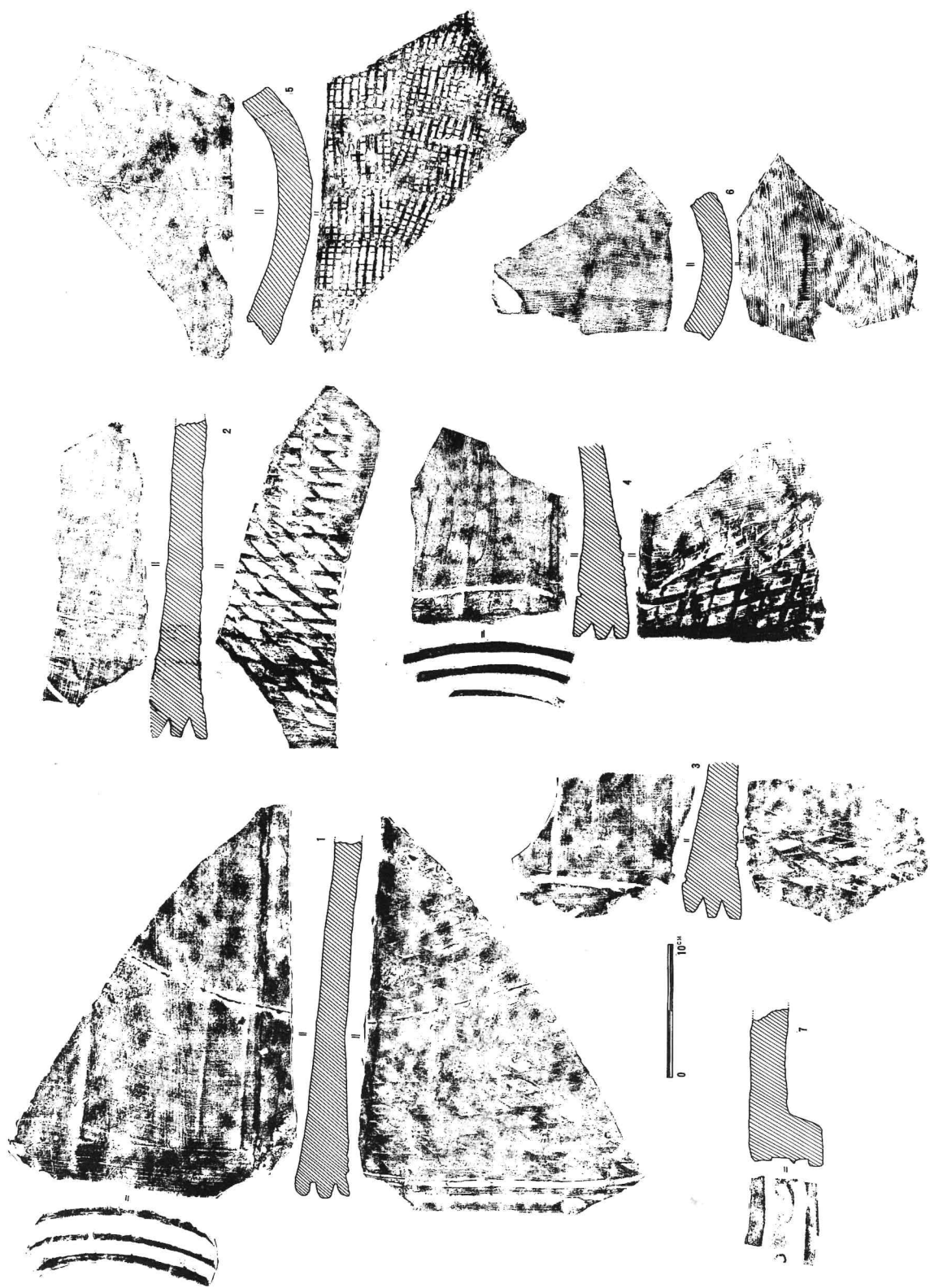
宇瓦として完全なものは出土していない。5例あるがほぼ同じものである。厚さ4cmで顎がある。整美な三重弧文の断面は台形と、台形の先端が丸味をもつものがある。上面の布目の一部が消されその部分に刷毛目がみられるものと、上面全部に整然と布目文が施されたものがある。裏面には斜格子の叩目痕を全面に付したものと、一部のみ格子目痕を残し他の部分に刷毛目がみられるものがある。以上の宇瓦は瓦溜から出土している。

唐草文字瓦 (第15図の7)

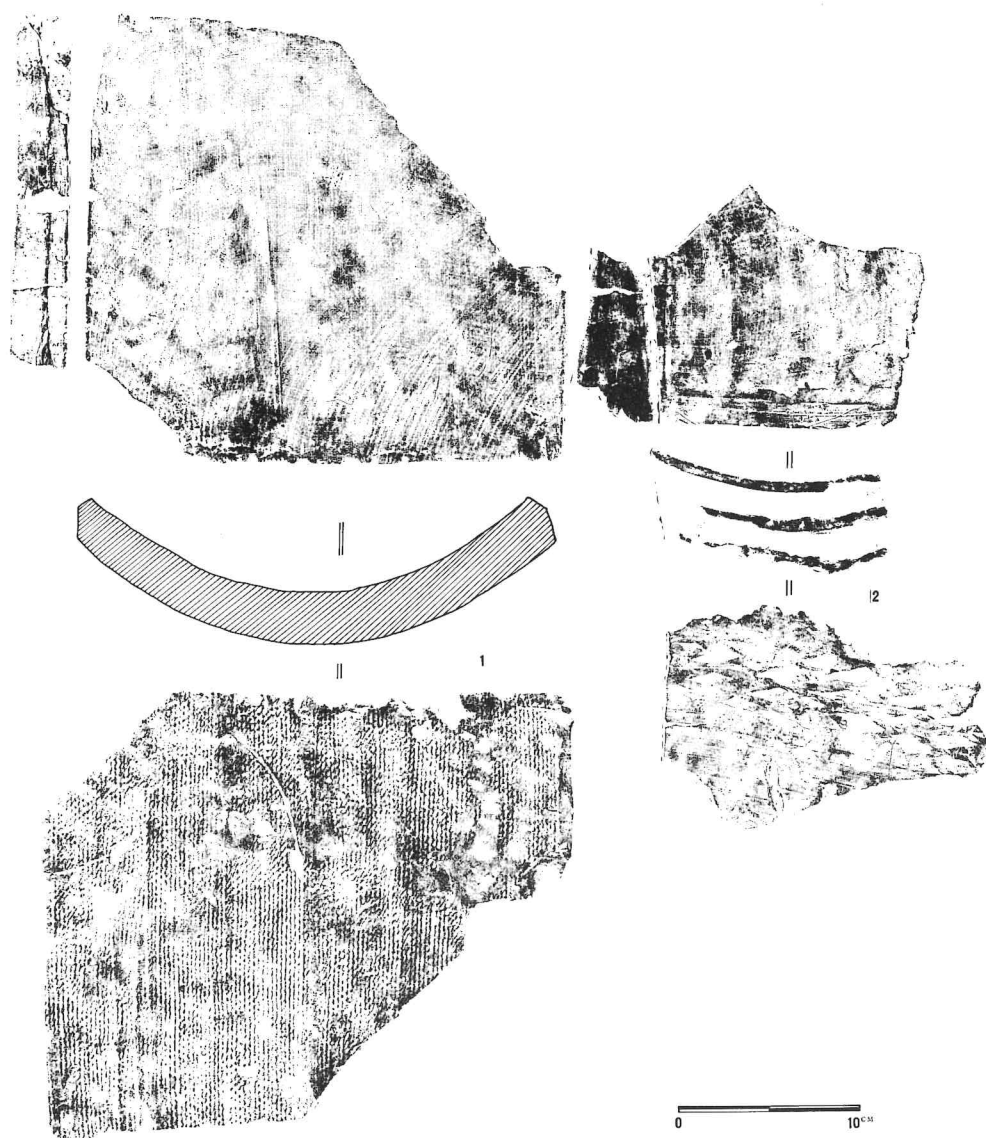
右捲三巴文軒丸瓦に伴う宇瓦とみられる。周縁は幅1cmの素縁で、内面には簡素化された唐草文が飾られている。瓦溜の上部から出土している点、室町時代の宇瓦とみられる。



第14図 蓮花文鑑瓦の瓦当のはずれたもの



第15図 宇瓦と平瓦実測図



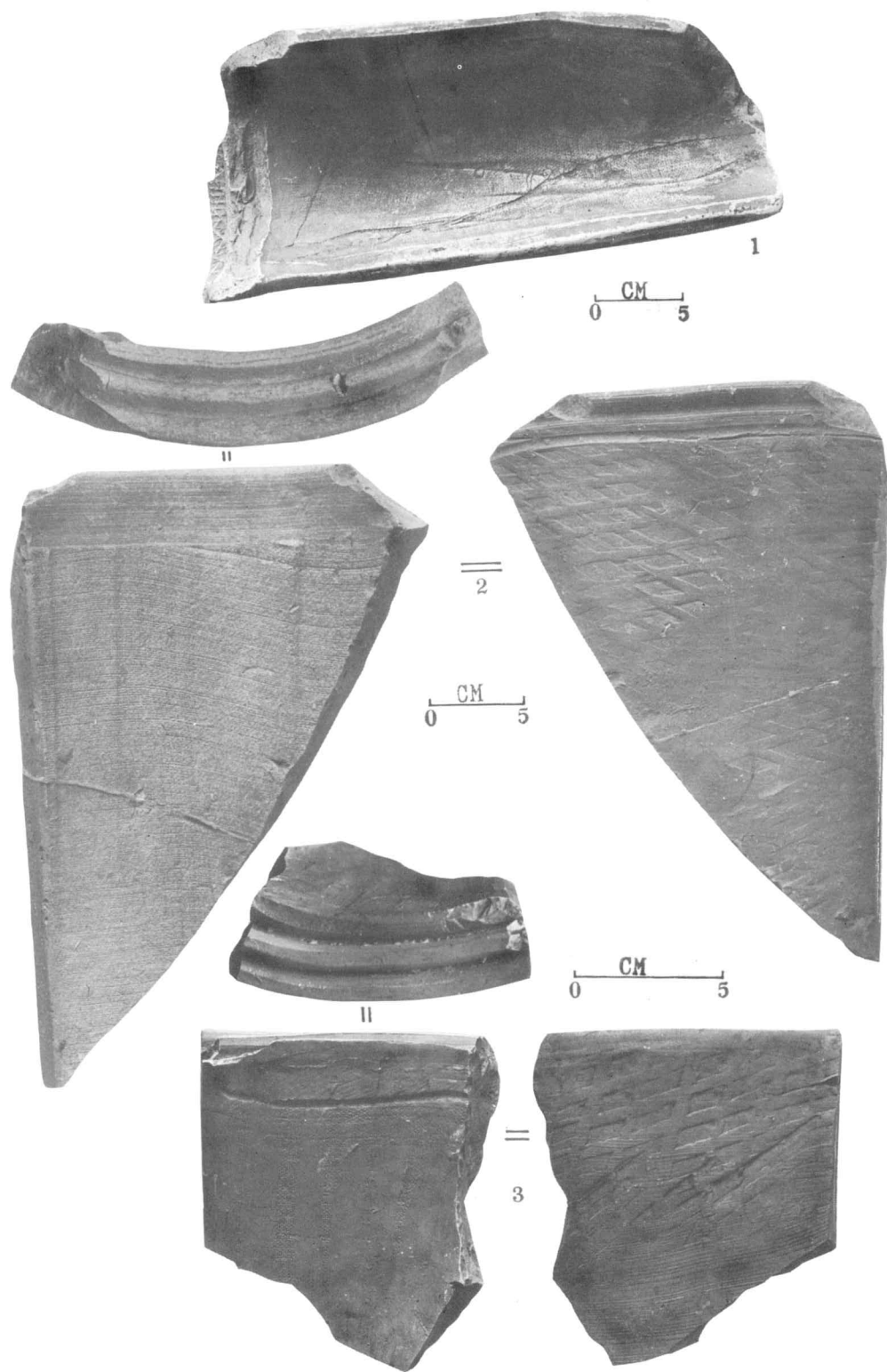
第16図 平瓦と宇瓦

平瓦(第15図5・6, 第16図1, 第18図, 第19図3・4, 第20図, 第22図1)

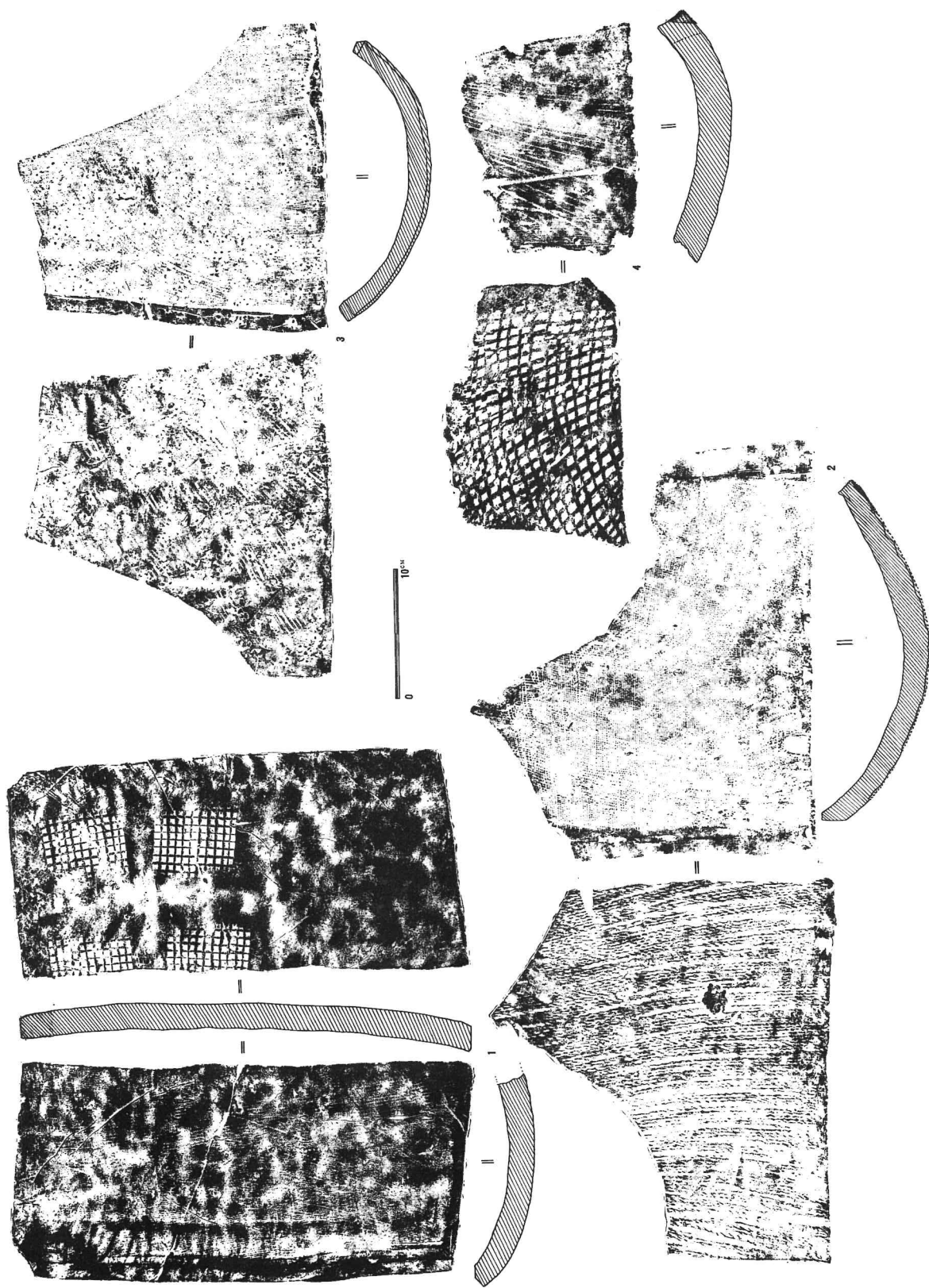
平瓦は出土数が多いが完形品はない。焼成は良いが火災により二次的に火を受けているためにやや軟質になっているものが多い。上面の布目は細目のものが多く、中には直交する布目文が多い。なお布目文の上を櫛状施文具で斜めに描いた痕が残るものもある。裏面の文様は次のようなものがある。

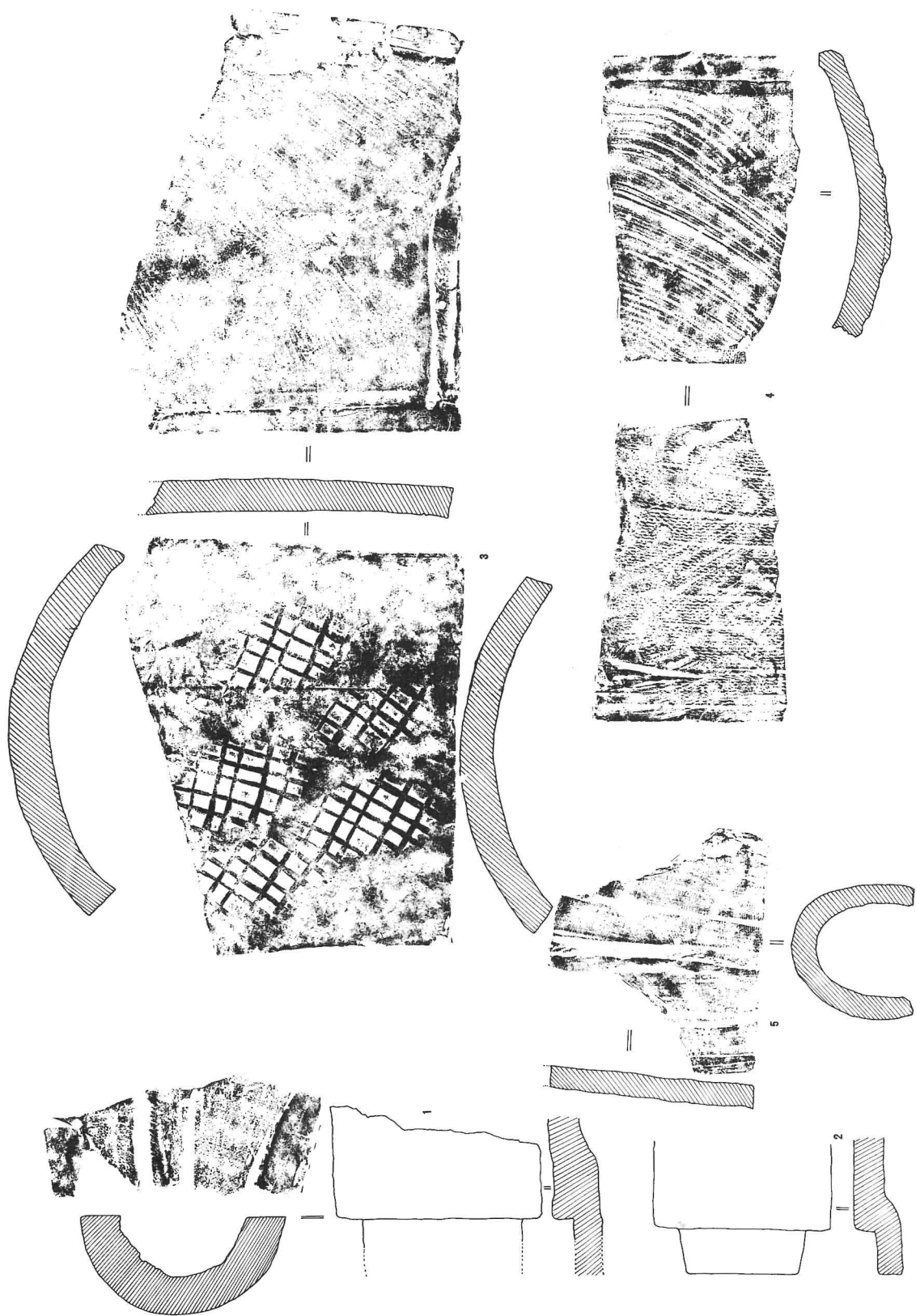
1. 縄を廻転プレスした縄目文痕のみられるもの。
2. 全面に小形の格子目のみられるもの。
3. ごく一部に小形の格子目を施こしたもの。
4. 大形の格子目が一部に施されているもの。
5. 小形平瓦の中に敲目のみられるもの。

平瓦の大きさは長さ34cm前後、幅は26cm前後、厚さは2cm～3cmのものが多数をしめている。なかには幅22cm、厚さ1.8cmの小形のものもみられる。

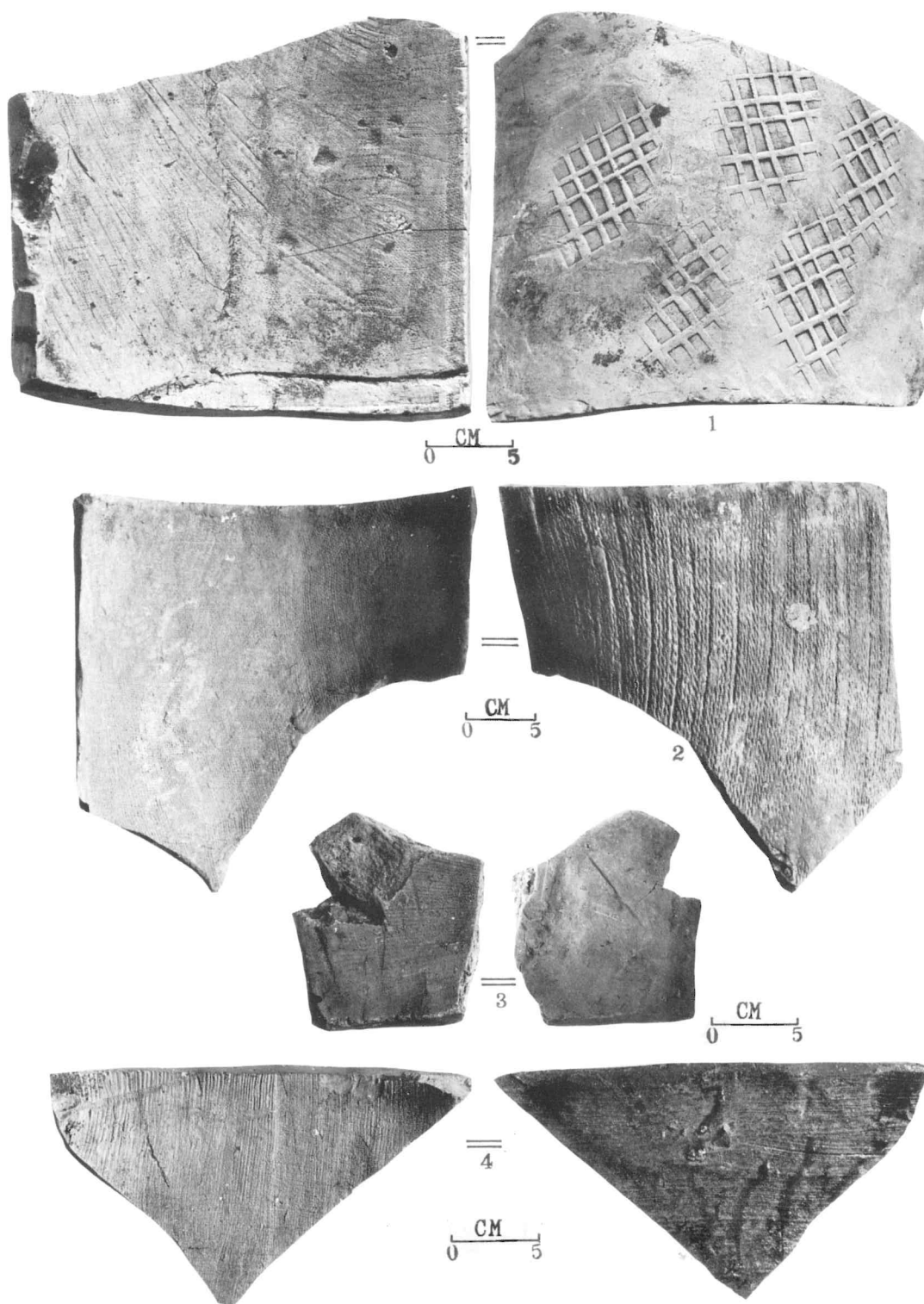


第17図 鑒瓦と宇瓦

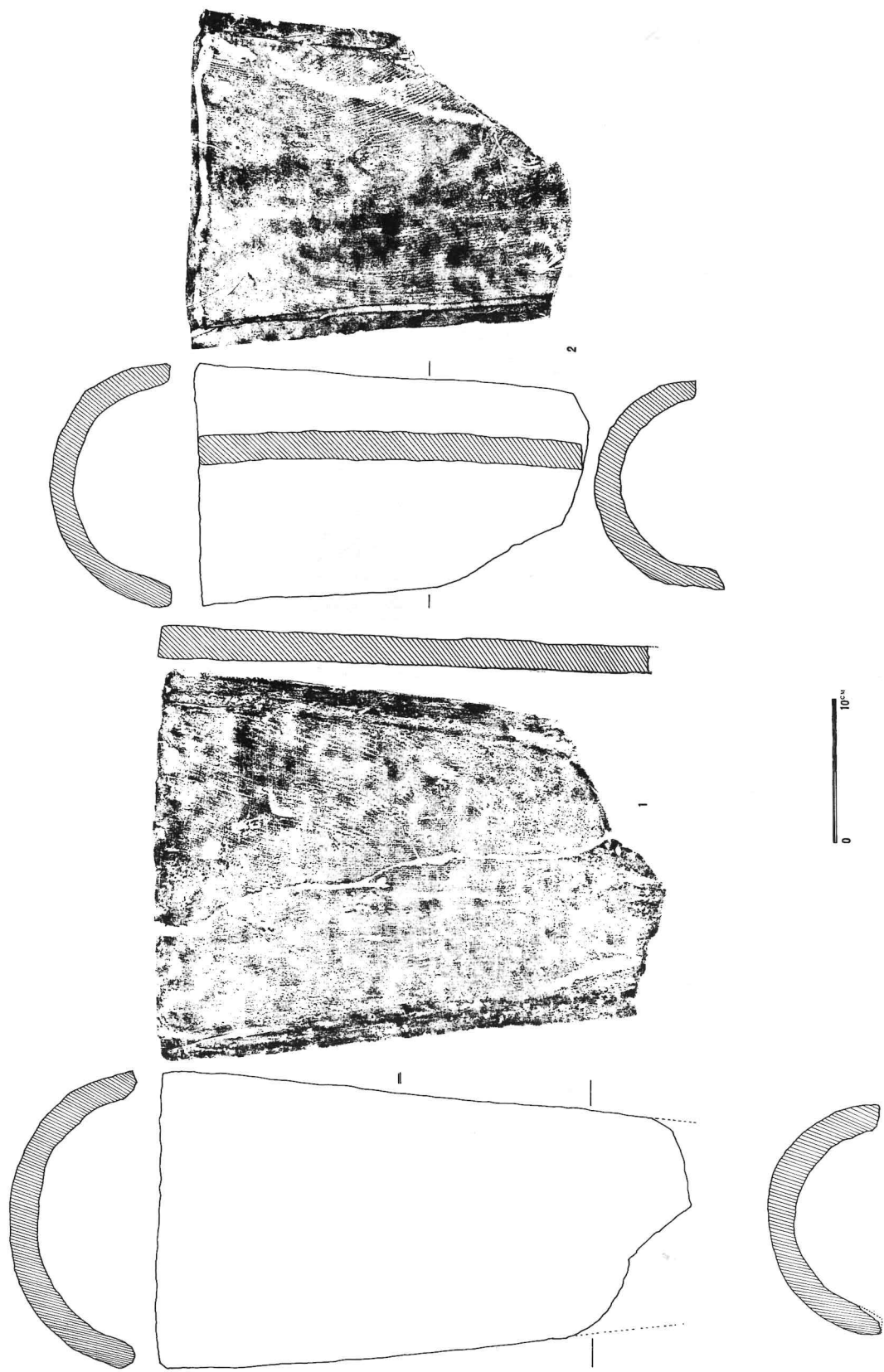




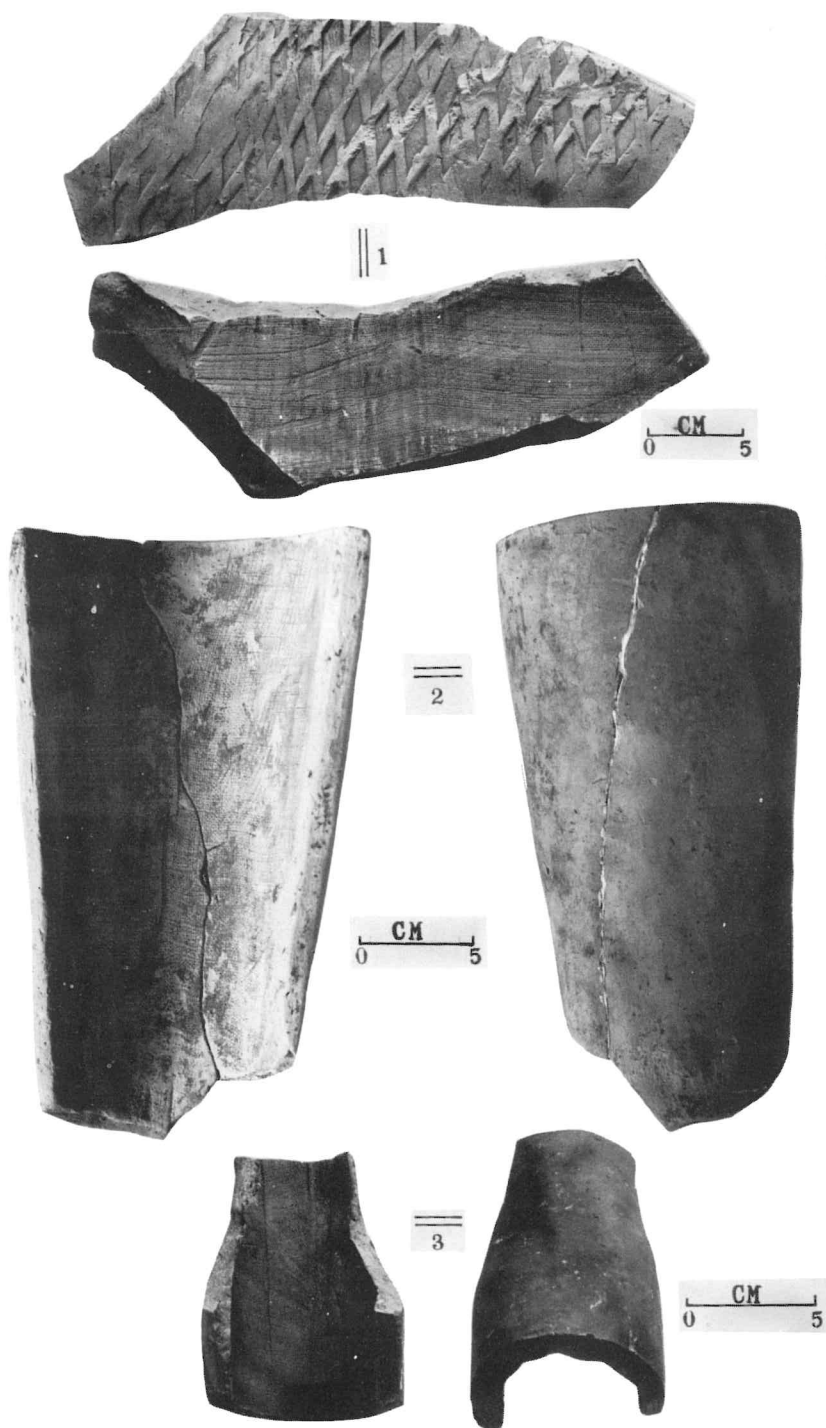
第19図 平瓦と丸瓦



第20図 平 瓦



第21図 丸瓦実測図



第22図 平瓦と丸瓦

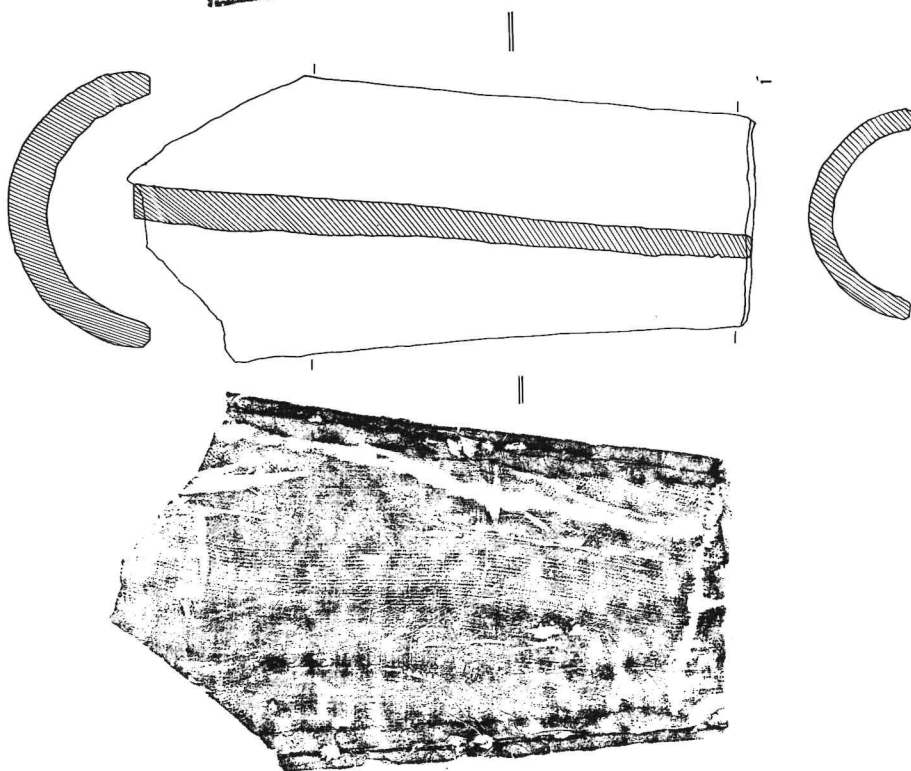
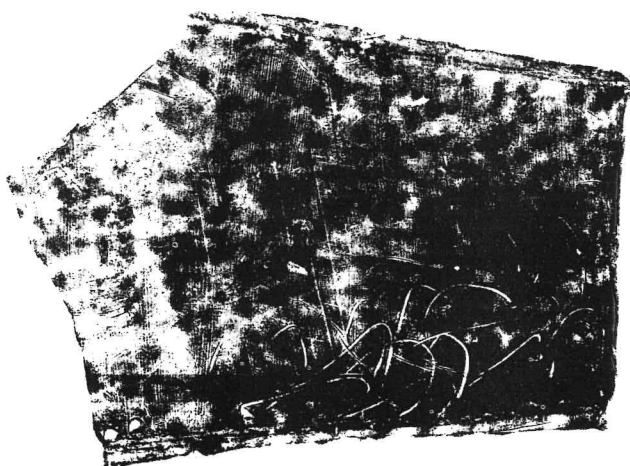
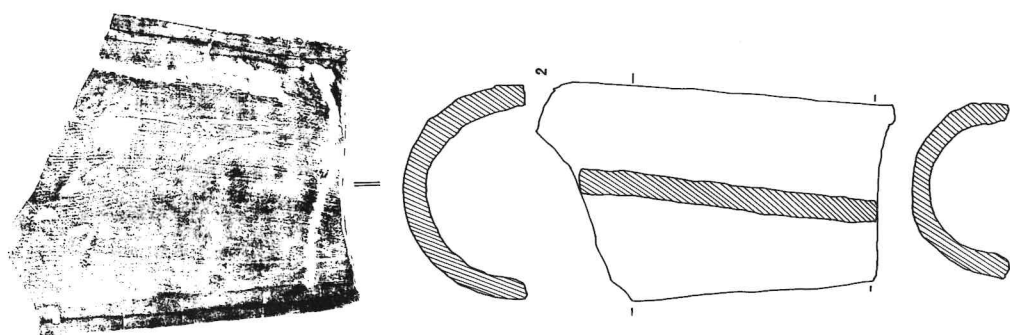
丸 瓦

(第19図1・2, 第21図, 第22図
2・3, 第23図・第24図)

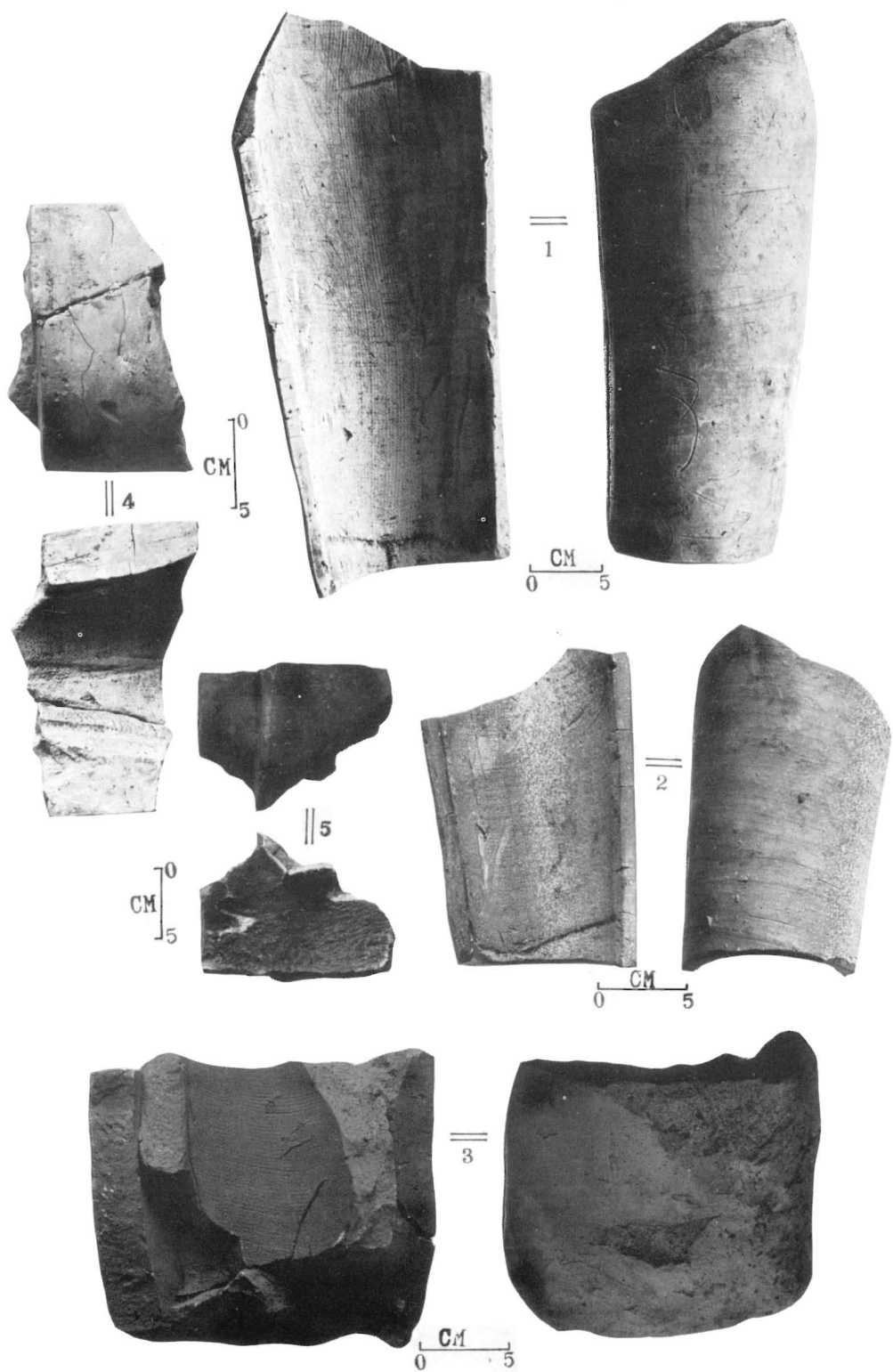
丸瓦の出土数も多いが完形品はない。行基葺瓦と玉縁瓦に大別できる。出土したものは行基葺瓦が多数をしめていた。器面は無文のものが多い、なかには(第23図1)全面に刷目を施し、一部に篋で文様のようにつづった痕のみられるものがある。内面の布目は平瓦と比べるとやや太目のものである。なおこの布目の上を刷毛で斜めにかいたものがある。行基葺瓦は長さ38cm, 幅21cm, 厚さ2cm程度のものと推定されるものが多い。なかには厚さ1cm前後のものもある。

玉縁瓦は器面に廻転縄目圧痕が薄く残るもので、幅14.5cm, 厚さ2.8cmである。なおほかにや、小形のものもある。

(広田・岡本)



第23図 丸瓦実測図



第24図 丸 瓦

IV 結

1. 鐘樓を建てる地区を全掘して出土した古瓦破片は、細片を入れて163片という数量になる。そのうち火事で焼けていない古瓦片48片、焼けたもの115片であり、とくに後者のものは細片のものが多かったのは当然であろう。この地区から出土した古瓦の大半は（約98%）は平瓦で、残り2%は丸瓦である。これらの古瓦は、そのほとんどが国分寺創建当初のもので、出土する遺構は本発掘区では特別なものはなく、ただ包含されている状況である。

本地区出土の平瓦で敲目文のあるものを注意すると、格子目文の敲目を持つもの19片、縄目の敲目を持つもの4片、刷毛目痕のあるもの4片である。なお格子目の敲目は、この地区出土のもので6類に分類される。格子目の敲目の平瓦はほとんど二次的に火を受けているものが多い。

鐘樓を建てる地区から出土した遺跡・遺物として、以上述べた古瓦のほかに室町時代の建造物の根石とそれらに伴ったとみられる古備前壺の破片・土師製土器の破片が出土している。土師製土器のなかには、高台のついたもの、糸切底のもの、篋おこしのものなどがあり、なかに灯明皿に使用されたものなどであろうか、杯の口縁が黒く煤けたものがある。

また創建当時の古瓦類と伴出した奈良・平安時代の須恵器も5片ほど出土している。器形としては壺・甕・杯の三種である。以上のうち甕の破片は、たぶん火災で火を受けたらしく内面は黒く煤けて発見された。この須恵器甕は、その敲目痕から推定して香美郡野市町白岩窯で作成したものであると思われる、平安時代後期のものである。実はこの須恵器使用の時期に土佐国分寺は最初の火災にあった痕跡がある。

創建当初の古瓦包含層下から、遺跡編で紹介しているように、方形のピット（貯蔵穴）が2基発見された。この貯蔵穴より凹線文のある甕形土器破片が出土しているので、この貯蔵穴の年代を確認することができた。弥生中期中葉後半（北カリヤ式土器＝畿内第Ⅲ様式一新、に併行）のものである。この貯蔵穴の発見により、土佐国分寺寺域には弥生中期からすでに弥生人が住んでいたことになる。それは約2千年前のことである。この貯蔵穴は屋根がついていたらしく、中央に一本の大きな柱穴が存在する。

2. 次に書院建替に伴う発掘によって、明確になった問題点を述べよう。書院を倒し、表土を10cm程度掘り下げると、奥行4間（間口は2間までは確認したが、あとは根石が存在しなかったので不明）の建物跡を確認した。ただこの場合、すでに礎石は亡失しており、礎石下の根石のみが残存していた。

この根石群をとりまいて、室町時代を中心とする諸遺物群が発見されている。この層で最も量的に多く出土したものは、灯明皿や供献の具として使用した土師質土器である。土師質土器の器形はほとんどが杯である。また室町時代の陶器として、古備前の壺と瀬戸天目茶碗の破片も発見されている。また伝世品とみられる南宋の青磁の破片も出土している。さらにそれらの遺物に混入して、当時流通銭であった北宋銭（天禧通宝・天聖元宝）、明銭（洪武通宝）や銭文のあきら

かでない島銭も出土している。

以上の室町時代の遺物のなかには焼けたものがあり、また遺物を包含する層には多くの木炭片があつて、この建造物は火災にあつたことを示している。なおこの建造物は出土遺物から推定して、その焼失の年代を室町時代末期にして、誤りなきものと思われる。

なお瓦溜の直上から串状木片（長さ6cm、幅0.8cm大の下部にいくにしたがつて細くなる）が出土しているが、これは出土層位から室町時代のものと推定される。

3. この書院建替地区は先の室町時代の遺物を包含する層をさらに約30cm掘り下げることで、5つの瓦溜を発掘することができた。

この瓦溜は書院の建っていた地区の約3分の2の広さをしめる。瓦溜は深さ30cm程度掘り下げ、そのなかに創建当初の古瓦を中心にその他の遺物を投げ込んだと思われる。もちろんこの瓦溜を造って遺物を投げ込んだ背景には、後述するように創建当初の土佐国分寺の火災のためである。火災のためできた灰燼を捨てるためのものである。瓦溜から出土した遺物については遺物編で詳しいが、とくにその数量のあらましをも紹介しておこう。

鐙瓦（8点）、宇瓦（3点）、平瓦（約3,000点）、丸瓦（約1,000点）、須恵器－奈良平安時代－（約40点）、土師器－平安時代－（約30点）、鉄釘（3点）、富寿神宝（10枚、杉の木の串状のものにつきさした状況で出土、杉の木の串状のものは腐らずにあった。）

以上瓦溜より出土したものは、その大半が焼けたもので、また瓦溜にも数多く木炭片がみられるところから、これらの瓦溜は創建当初の建造物が焼失して、その残骸を整理するために作られたものであることを物語る。この地区の平瓦は格子目文の敲目のあるもの、縄目の敲目のあるものを問わず、各種の平瓦・丸瓦・鐙瓦・宇瓦が焼けている。

出土した鐙瓦のうち、今回発見された単弁蓮花文のものは二種類とも土佐国分寺では未発見のものである。これによって創建当初ないしそれに近い頃の鐙瓦の種類は、従来の四種類から六種類へと増加した。しかしこれらの鐙瓦に伴う宇瓦は、三重弧文の宇瓦で一種類しかない。

富寿神宝の発見も重要であり、それが串にささったままで10枚も出土したのは特筆することができる。あるいは鎮壇具の一つであつた可能性も充分にある。

瓦溜の中から発見される須恵器については、特に注目すべきものがある。1の鐘楼を建てる地区の発掘の結果に関してもこのことを述べている。瓦溜から出土した須恵器は点数にして40点余りであるが、時代にして奈良時代から平安時代後期にまたがるものが幅広く存在する。そのうち最も注目すべきはそれらの須恵器群で、もっとも新しい須恵器が時代的にいつかということである。瓦溜から発見された須恵器のうち、最も新しいものは鐘楼を建てる地区から出土したものと同一であつた。外面に横に平行に敲目痕を持ち、内面には青海波文を持たない甕である。このような甕類は、香美郡野市町佐古白岩窯より発掘したことが従来あつて、時期は平安時代後半という幅を持たせた年代で言うことができよう。この須恵器がいわばいくつかの瓦溜の中から発見される遺物の中で最も新しい。そしてこの最も新しい須恵器は、同じ瓦溜の中に創建当時の瓦とい

っしょに棄てられている。このような遺物の示す事実から、土佐国分寺の創建当時の建造物は、平安時代後半に火災にあったと推定して誤りなきものであろう。

4. 瓦溜と同一の層の北部の一部から古墳時代中期（4世紀末～5世紀前半）の竪穴住居跡1基とそれに伴う貯蔵穴が2基が発見された。この竪穴住居および貯蔵穴より本地方で呼称している馬場末式土器（土師第Ⅱ式）片が数片出土している。またこの竪穴住居跡直上に古墳時代後期一とくに7世紀前半ごろとみられる須恵器片も数片発見されている。

最も大きく、かつ位置的に最も東にあった瓦溜は発掘を進めるうち、その最下部から弥生土器（後期中葉および終末）片が数片散在していることが判明した。よってこの瓦溜を注意深く掘り進むうちにさらに判明したことであるが、瓦溜を平安時代後期に掘り下げる時、元来地下にあった弥生住居跡をも掘ったようで、結局は弥生住居跡は壁面の一部がそのままの状況であるにすぎない程度に瓦溜を掘る際にくずされている。なお、この弥生後期の住居跡出土の数点の土器片は弥生後期中葉のヒビノキⅠ式土器、弥生後期末のヒビノキⅡ式土器であった。

土佐国分寺の今回の発掘によって、国分寺創建前に各時代の人たちによって住みつかれていたことが判明した。このように古い時代から — 具体的に言うと、弥生中期中葉・弥生後期中葉・弥生後期末そして古墳時代中葉、さらに古墳時代末葉 — 住み易い土地柄であったればこそ奈良時代に国分寺が建立されるのは理の当然の事であるといえよう。

（岡本）

1. 国分寺鐘楼堂建設作業関係者（名簿）

イ. 施工業者	南国市左右山	井上工務店	代表者 井 上 速 男
ロ. 設計監督	高知市薊野	明神建設設計事務所	明 神 政 義
ハ. 基礎工事	南国市岡豊町笠の川	笠の川建材店基礎部	森 義 明
ニ. 化粧石積工事	土佐市新居		渡 辺 敏 明
ホ. 木 材	高知市仁井田	(株)ソネダ製材	
	幡多郡十和村	伊藤製材	
ヘ. 大 工	高知市五台山三ツ石		(棟梁) 中 山 通
	高知市宝永町 9 の 17		中 山 孝 志
	幡多郡十和村戸川		林 重 利
	高知市宝永町 9 の 9		西 村 康 二
	南国市笠の川		大 川 治 義
ト. 左 官	香美郡土佐山田町伏原		比 山 隆 雄
チ. 瓦	香美郡土佐山田町楠目	(有)楠目瓦工業	代表者 楠 目 能富貴

2. 国分寺書院建設工事作業関係者名簿

イ. 施工業者	南国市左右山	井上工務店	代表者 井 上 速 男
ロ. 設計監督	高知市薊野	明神建設設計事務所	明 神 政 義
ハ. 基礎工事	南国市比江	窪添建設	窪 添 一 夫
ニ. 大 工	高知市五台山三ツ石		中 山 通
	高知市宝永町 9 の 17		中 山 孝 志